

### 空間の輪郭ーラウムプランの新たな展開ー

野村, 裕志 / NOMURA, Yuji

---

(発行年 / Year)

2009-03-24

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2009-03-24

(学位名 / Degree Name)

修士(工学)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

P377.5  
M35-2  
2008-33

修士設計 2008-09

# 空気の輪郭　ーラウムプランの新たな展開ー

法政大学大学院工学研究科建設工学専攻  
富永研究室

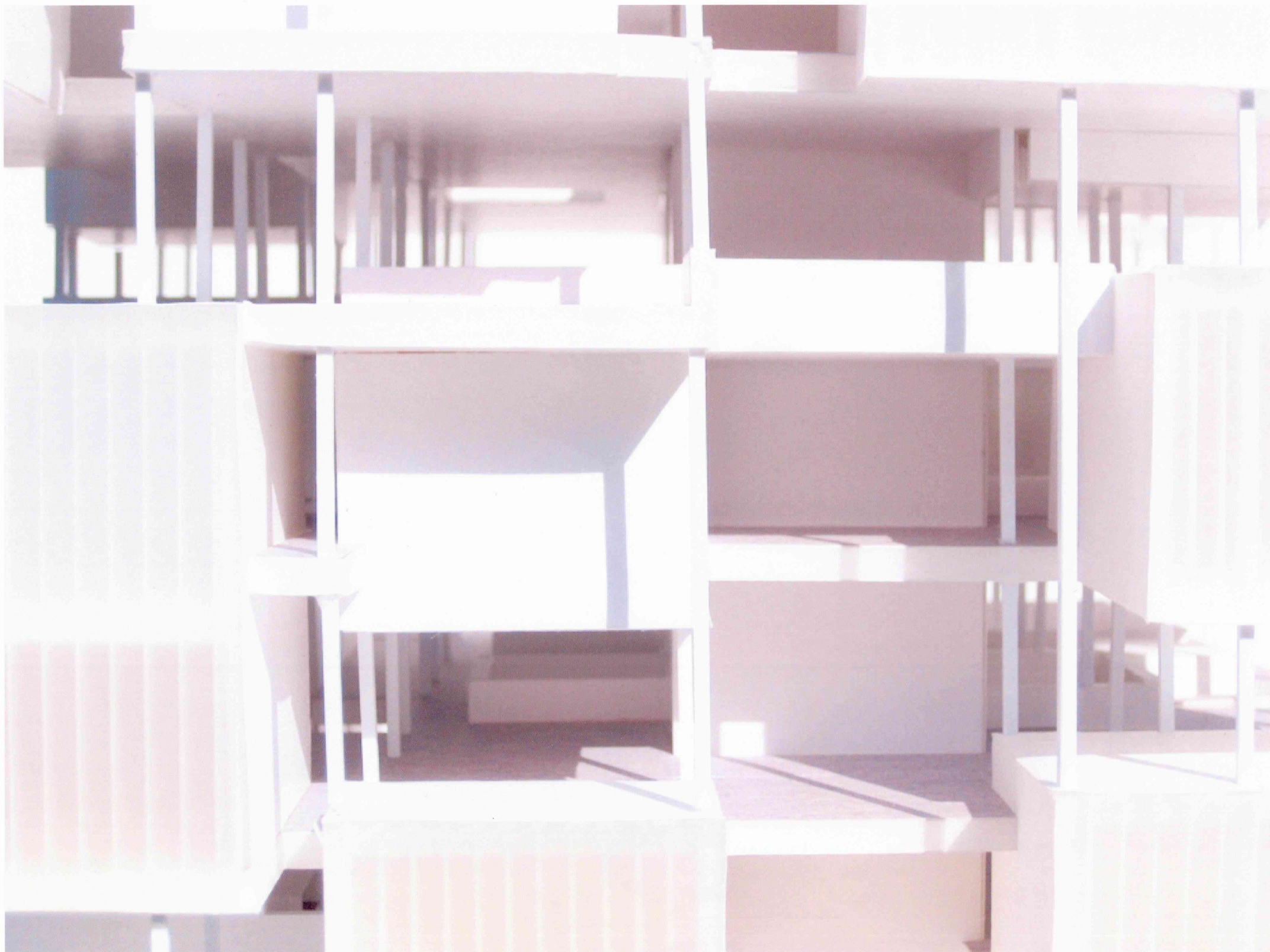
主査 富永譲 教授

副査 渡邊眞理 教授・佐々木睦朗 教授

07R5330

野村 裕志





空気の輪郭　ーラウムプランの新たな展開ー

Outline of the Air - Deveropment of RAUM Plan -





空気の輪郭　ーラウムプランの新たな展開ー

Outline of the Air - Deveropment of RAUM Plan -

Contents 目次

p - 3 英文概要

p - 4 設計主旨

p - 5 0 章 背景と目的

p - 6 空気の輪郭について

p - 7 ラウムプランとスケール

p - 8 経験

当たり前のことを意識化する

p - 9 1 章 設計

p - 12 プログラムと敷地

p - 14 設計手法

p - 20 設計内容

p - 45 2 章 事例研究

p - 51 あとがき・謝辞・参考文献

Master Thesis 2008-09  
Outline of the Air -Development of RAUM Plan-

No.07R5330  
Yuji Nomura

Professor/ Yuzuru Tominaga  
Graduates School of Enginieering.Civil Enginieering and Architecture at Hosei Univercity.

Move inside a peice of architecture, or change your view point up or diagonally.  
Then, you will find a room exists around the border where it feels like no one stays, the place a room connects to another room. It appears around the place where tha flat ceiling or floor meet vertically with the wall at eye level.  
If a box covered with faces assumed a substance, its volume could be called hollow volume, which is a mass of air that has only outlines. Also, it is an accent for the space which appears when the condition of the light are shadow are filled.  
The purpose of this project is to make the space as a place for people to stay and whereas, make this outline of the air.

0-1.The Outline of the Air

The picture on the right, I have mentioned before, is a picture of the opening between the main atrium and stairs in the Galicia museum.  
Because I was impressed by this picture, I started to study and analyze the law of spaces like this.  
Looking at many of those which rouse my interest, the red lines like on the picture appears as one of the laws.  
If you think this as an outline of the air, you can see the small mass of the air.  
The small mass of air softly connects a room and a room, a room and its exterior, eyes and eyes, and divide them moderately.  
I thought if it's possible to construct a raumplan by changing the volume to a room people can spend their time with this hollow volume.

0-2 The Raumplan and Scale

In generally, raumplans seen in Adolf Loos's works are three-dimensionally structured with the rooms (raum) adapted ceiling highth and width. The spaces made by raumplan are related to each other so it makes various quality of the space, and it also makes possible for people to have various experiences of the space.  
However, because of its complicacy, designing with this method would be difficult when the architecture goes over a certain scale. Substantial reasons are:

.Difficult to balance in structure.  
.Details which has human scale disappears into whole and that changes the subject of the architecture.  
. If the square goes bigger and bigger, the contrast of the height and depth of the space will be small so that make it difficult to manage the relationship of the spaces.  
.Need to know the spaces three-dimensionally to make sure if spaces relate to each other. So if the architecture is huge, your brain cannot catch up. (Loos himself mentions about this difficulty in his book)  
There might be many other things for this but during study , I have found some stuff.  
I can nod that almost all of the high or middle high buildings are planned by pile same layer .But I wonder if it's really impossible to design high buildings by the method of raumplan.  
To find a solution for this question is also the purpose of this project.

0-3 Experience

After I started to think in the way I mentioned above, I experienced some spaces with it in my mind. In those spaces, I could feel aroom bigger than reality .When I passed a space to another, I felt something like implication.

0-4 Aware of Matters of Course

Not only looking at substance itself but the relationships between substance and substance and understand them. As the final objective, I want to practice creativity in designing architecture. The phenomenon happens in the picture on right happens by chance in our daily life, even in different shapes. But by feeling the consciousness of a common thing, I think it would be possible to make spaces with individuality and relate spaces to each other.  
I was also affected by reading Peter Izenman's master thesis in my laboratory. So It has brought me to this thought and I designed an architecture as an answer.



建築の内側を移動する、あるいは視線を上や斜めにやってみる。

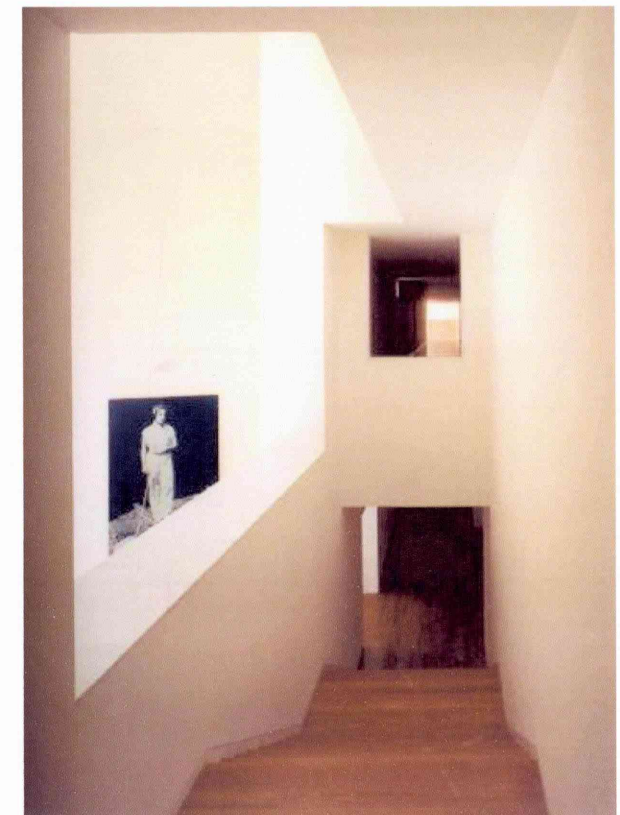
するとある空間から次の空間へと切り替わる場所、境界部分に、人の居場所としてではない部屋があるように感じる。

それは、視線の高さによって、水平の天井面又は床面と、垂直の壁が交差する箇所に現れる。

面で覆われた箱を実のヴォリュームとするなら、[虚のヴォリューム]ともいえる、輪郭だけを持った空気の塊である。

またそれは、光と影、視線の条件を満たしたときにのみ感じ取ることのできる空間にとってのアクセントでもある。

人の居場所としての空間をつくと同時に、この空気の輪郭の方をつくりあげていくことが本計画の目的である。



## Chapter 0

## 第0章 背景と目的

## 0-1 空気の輪郭について

## 0-2 ラウムプランとスケール

0-3 経験

#### 0-4 当たり前のことを意識化する

0-1 空気の輪郭について

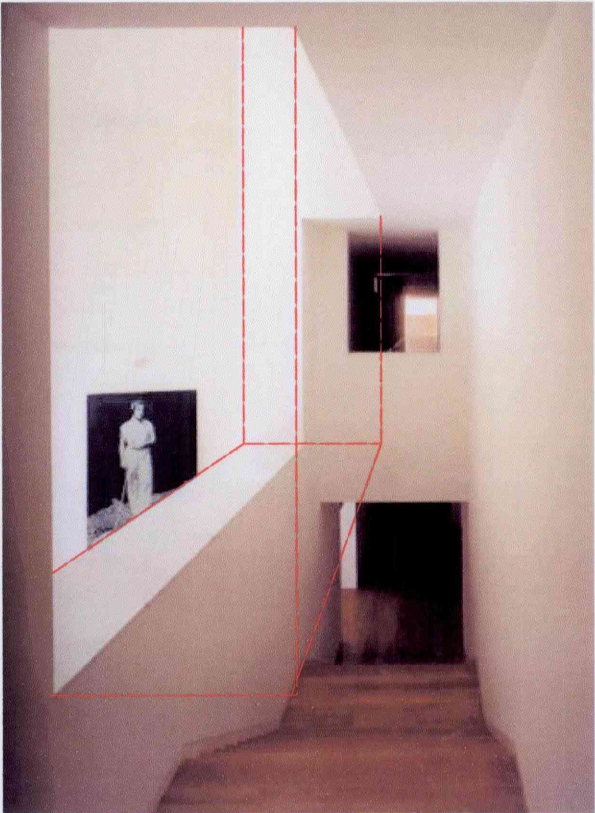
先項でも記載した右の写真はガリシア美術館（アルヴァロ・シザ）のメインアトリウムと階段通路との間に存在する開口部分である。

この建築写真に魅せられたことから、このような空間の原理についての研究・分析・スタディーを進めていった。  
興味を惹かれるこのような作品を多く眺めていくと、その原理のひとつとして、  
右の赤線のようなラインが浮かび上がってくる。

これを空気の輪郭であると考え、そこに小さな空気の塊の存在が感じられる。

その小さな空気の塊は、空間と空間、空間と外部、視線と視線を柔らかく結び、そして程よく分節するものである。

人が過ごす部屋であるヴォリュームに加えてこの虚のヴォリュームを操作することで、ラウムプランを構築することができないか考えた。



0-2 ラウムプランとスケール

アドルフ・ロースの作品にみられる、それぞれの場所にふさわしい天井高と幅を持った、人間を中心とする部屋(ラウム raum)を立体的に組織していく仕方が一般的にいわれるラウムプランであると考える。ラウムプランで考えられた空間同士は複雑に関係し、感じ取る空間の質は多様に満ち、変化のある経験をすることができる。

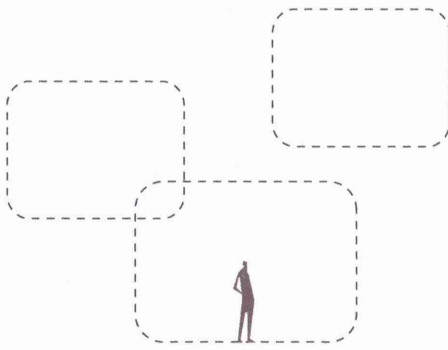
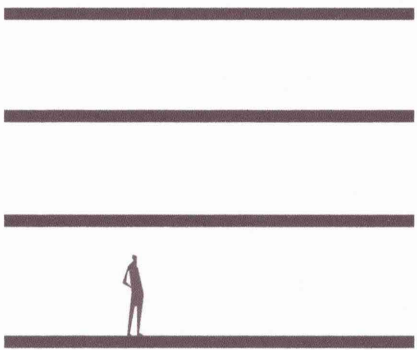
しかし、一方でその複雑さゆえに、あるスケールを超えると設計が困難になる場合がある。その具体的な理由は、

- ・規模が大きくなると求められる建築の主題も大きく変わり、細やかな操作などは全体の中に消えてしまう。
- ・面積が広くなればなるほど、空間の高さと奥行き比率が薄くなり、空間同士の関係というものをつくりづらくなってしまう。
- ・ある部屋が隣の、もしくは上下の部屋に影響を及ぼすため、3次元的に空間を捉えなければならないので、規模が大きくなればなるほど、そもそもの設計する側の頭が追いつかなくなってしまう。(ロース自身もその困難さを著書等で述べている。)

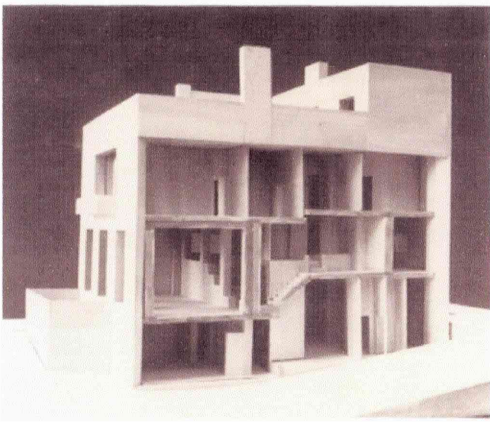
他にも現実的な諸事情が絡んでくるのだと思うが、以上がスタディーをしている段階で気付いた問題点である。

都市に溢れる中高層ビルのほとんどが等間隔の層をただ積むだけのものになっていることも仕方がないことのようにも思えた。その矛盾の中でも、ラウムプランの空間的な魅力を求め中高層において、ラウムプランの考え方を適応することはできないのであろうかと考えた。

そこを解決していくことも本計画の目的のひとつである。



人間にとってふさわしい部屋（ラウム raum）を立体的に組織していく



ミュラー邸（アドルフ・ロース）



0 - 3 経験

先に述べた考え方をするようになった後、そのことを意識しながら実際に空間を経験した。

それらの空間では、壁で囲われている面積以上の拡がりを感じられ、そこを移動するときには空間から空間へ  
間で一呼吸する、含みのようなものがあった。

0 - 4 当たり前のことを意識化する

物質自体だけに目をやるのではなく、物質と物質との間にある関係を読み解くことで、最終目標としては  
Building ではなく Architecture としての空気の造形技術を磨きたいと考えている。

また右の写真のような現象は、カタチは違うにせよ、偶然的に起きている当たり前のことでもある。  
しかし、この当たり前のことを意図的につくることによって空間の個性や空間のつながりをつくっていきけるのではない  
かと考えた。

研究室で行なったピーター・アイゼンマンの修士論文を読解したことにも影響を受け、空間の構成原理のような  
ものを探る姿勢が身につき、またその考えた原理を具体的な設計作業の中でさらに理解していくこともまた目  
的である。



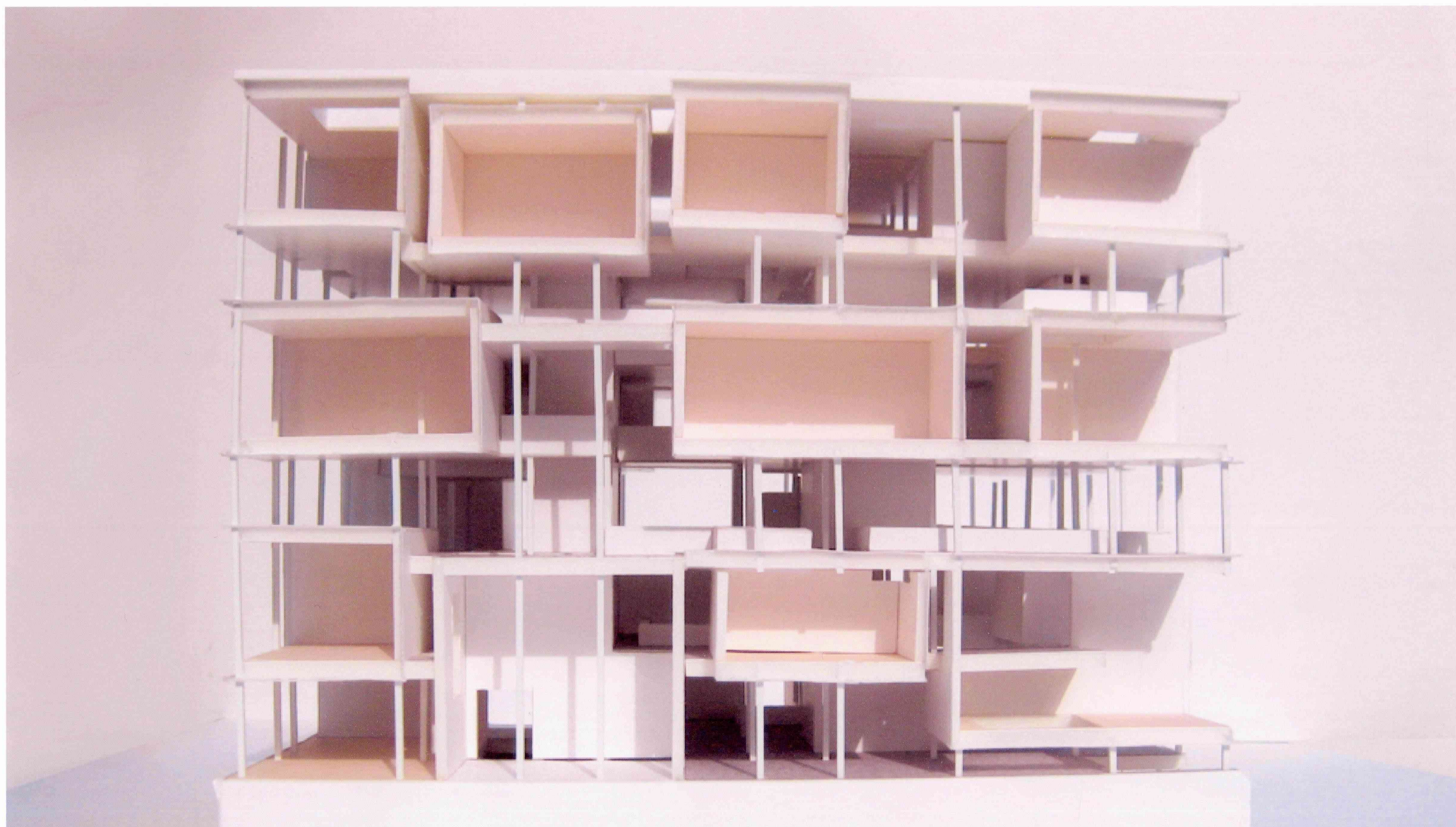
ピカソ美術館（ロラン・シムネ、パリ）



立体的なアマルフィの都市空間

|  |                                                                                                                |  |                                                               |
|--|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|---------------------------------------------------------------|
|  |                                                                                                                |  |                                                               |
|  | <div>Chapter 1</div> <div>第 1 章 設計</div> <div>1 - 1 プログラムと敷地</div> <div>1 - 2 設計手法</div> <div>1 - 3 設計内容</div> |  |                                                               |
|  |                                                                                                                |  |                                                               |
|  |                                                                                                                |  | Master Thesis Outline of the Air - Deveropment of RAUM Plan - |
|  |                                                                                                                |  | 空気の輪郭ーラウムプランの新たな展開ーpage 009                                   |





## SECTION MODEL

Master Thesis Outline of the Air - Deveropment of RAUM Plan -

空気の輪郭 ーラウムプランの新たな展開ー

page 010

プログラムと敷地 + 設計手法

P R O G R A M

S I T E

C O N C E P T



シェアオフィス Share office

現代は職種が多様化し、ワークスタイルも変化してきている。インターネット上だけで一通りの仕事ができしまったり、逆にランナーと呼ばれる、外に飛び回り会社にいることが少ないワーカーもいる。また、緊急のプロジェクトチームを組み共同作業をする場合もある。

衣食住の「住」にも重きを置くヨーロッパでは、生活の大半を過ごすオフィスには、家と同じようにプライベートな場とパブリックな場、リラックスする場と集中する場、コミュニケーションする場などがあり、心身共に充実した状態で、知的生産性の向上を求めている。

空間側には、専有、共有 / 随時利用、非常時利用の場が必要となっている。

つまりワンフロアに個人デスクが並ぶ従来のスタイルに変わる、ワークスタイル、それに対応するワークプレイスが求められてきている。

中規模の企業 + 5〜10人規模の小さな企業 + 起業家や個人のための仕事場・ヴァーチャルオフィス



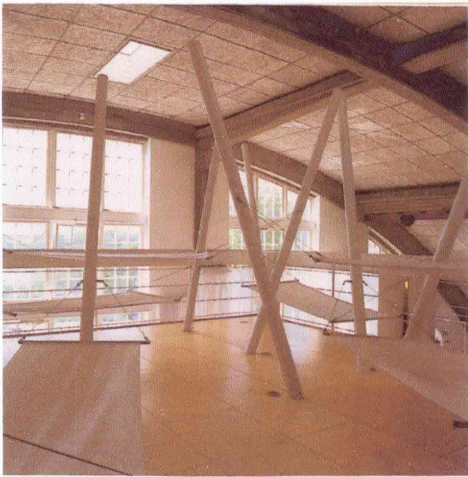
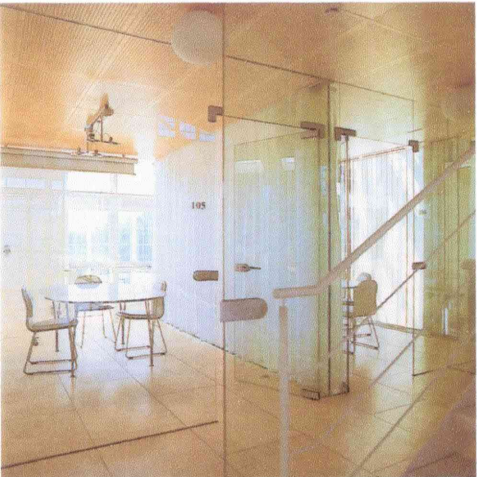
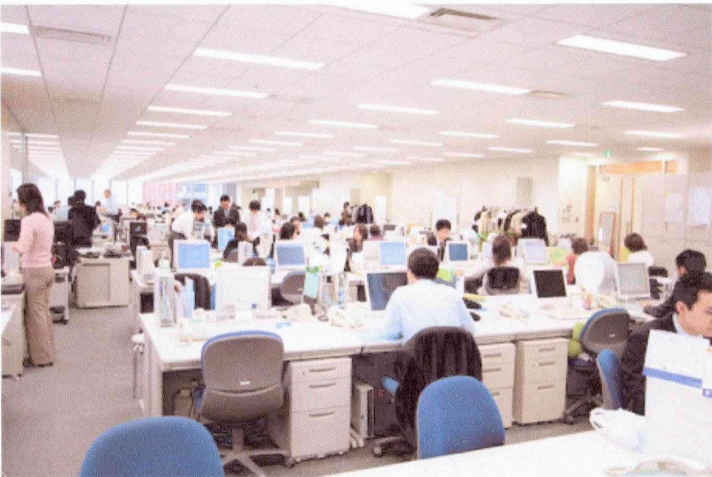
work place

専有 / 個人デスク (道具、書類) ————— 共有 / タッチダウンスペース (ノートPC、IDデスクトップ)  
随時利用、共用 — ミーティングルーム、ライブラリー、コピー機、商談・応接間、メールボックス、イベントスペース、作業スペース  
open public ————— カフェ・ショップ・ギャラリー・オーディトリウム・公園・ベンチ

work style



状況に合った空間の室の違いと、程よいコミュニケーションを生む空間同士の関係の多様性



従来のデスクワークに変わるワークスタイルとワークプレイスが求められる





## 広尾

広尾はオフィスエリアとして人気の高いエリアのひとつである。

またこの敷地は有栖川記念公園と道を挟んで位置する。

周辺には大使館が近くにあることから外国人も多く生活している場所である。  
現在は13戸の賃貸住宅と店舗やクリニックが数店入ったマンションがたっている。

自社ビルを建てるには費用がかかるこの場所に、会員制のシェアオフィスを計画する。

ワーカー達が集まり、交流し、活気に溢れるような新たなワークプレイスを提案する。

- 周囲を道路で囲われている（どの角度から見られても良い概観デザイン）
- 付属する公園（一体の敷地としてデザイン）
- 緩やかに傾斜する地形（設計の手掛かりに活用）
- 有栖川公園の景色をうまく取り込む



### 概要

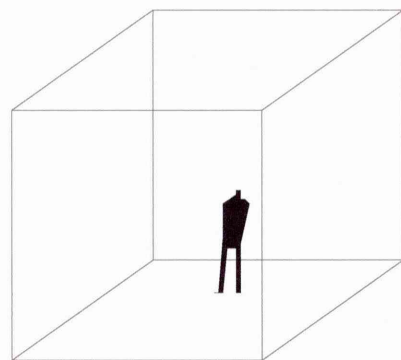
|      |                       |
|------|-----------------------|
| 所在地  | ： 東京都港区南麻布5丁目-16-13   |
| 敷地面積 | ： 1326 m <sup>2</sup> |
| 建築面積 | ： 763 m <sup>2</sup>  |
| 延床面積 | ： 3951 m <sup>2</sup> |
| 建蔽率  | ： 57.6%               |
| 容積率  | ： 298.0%              |
| 階数   | ： 地上6階、地下1階           |
| 構造   | ： 鉄骨造                 |



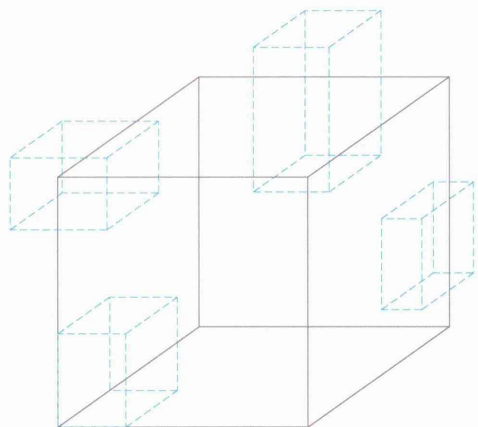
1-2-1 空間構成のプロセス

人の過ごす部屋としてしっかりヴォリューム感は維持しつつも、なんとなく部屋と部屋、全体とがひとつながりの空間にも感じ取れるような、分節と連続の中間的状況をかたちづくる。

□ 境界面の開口を空気の厚みをもった小さなラウムとして扱う

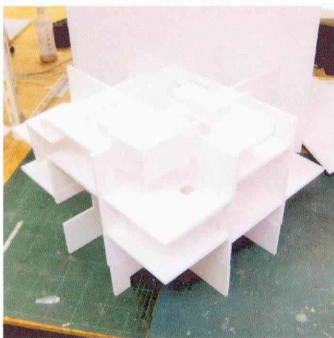
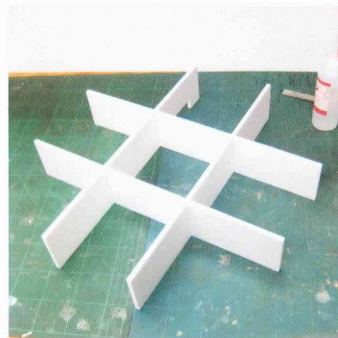


人が過ごす場としてのヴォリューム感を確保する



境界面に対しての開口を厚みを持ったものとして知覚できるように開けることで、部屋としてのヴォリュームは保持されつつも、空間同士がダイレクトに切り替わるのではなく、空気が繋がっていくような連続した状況をつくる

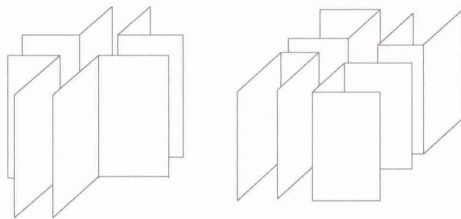
STUDY



.1. 井型に組んで、分割された部屋を基本とし、その間に小さなラウムを挟ませていく案。  
ある部屋を基準にして空けるとそれが隣の部屋、上の部屋に必要以上に影響してしまう。



2. そこで、部屋を切り離し隙間を設けるように棟状のヴォリュームを基本とする案。隙間を介してラウムが繋がっていくイメージ。しかし棟状にした段階で部屋の大きさが単調になってしまうという問題があった。



→2の段階でできた空間。厚みを持った開口によって吹き抜けの空間と奥の部屋が、小さなラウムを挟んで繋がるようなイメージ。





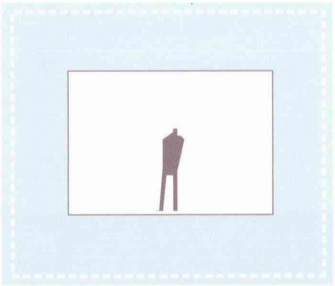
□ 空間の『含み』 —— ミュラー邸をヒントに



ミュラー邸では段差のある空間同士の相互関係に加えて、赤で示した階段がまわる余白部分があることによって、境界面が二重、三重になることで、空気の厚みが拡張されているように見える。この階段部分は部屋と部屋の間に含みをもたらしている。

今回は、これを発展させ、この赤い含み部分をさらに上下にも設けることで全方向に拡張可能な状況をつくれないか考えた。

□ 全方向に含みをもたせて、全体を構成する

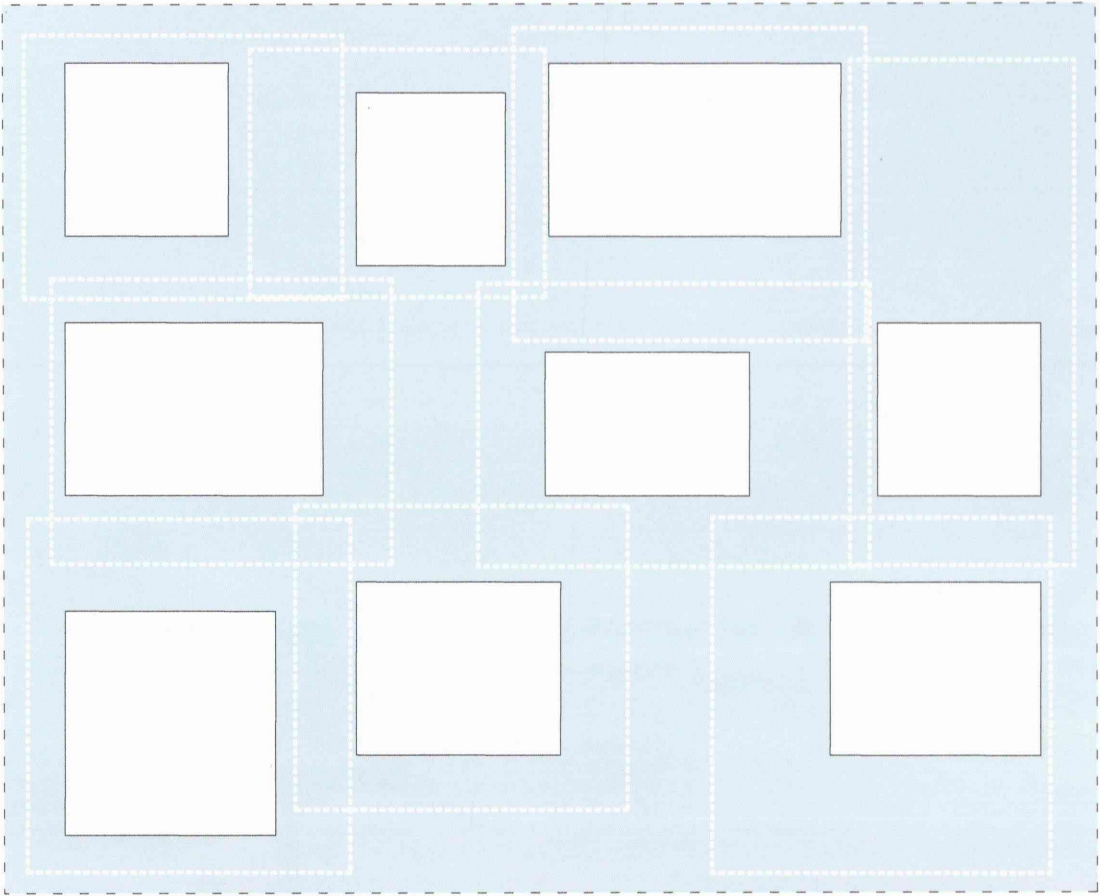


部屋に対して上下左右に含みをもたせる

右のダイアグラムで示した操作をすることによって、  
平面的にも断面的にもヒエラルキーがなくなり、水平垂直方向の要素が連続的  
になるため、より三次元的な空間となる。

さらにスタディー段階での問題の解決として

- ・ 厚みをもった空気の輪郭をつくる拡張分が影響を及ぼす範囲をコントロールで  
きる。
- ・ 部屋そのものを立体的に配置した時点で、間の含み部分では、部屋の面やライ  
ンによって空気の輪郭がかたちづくられる。

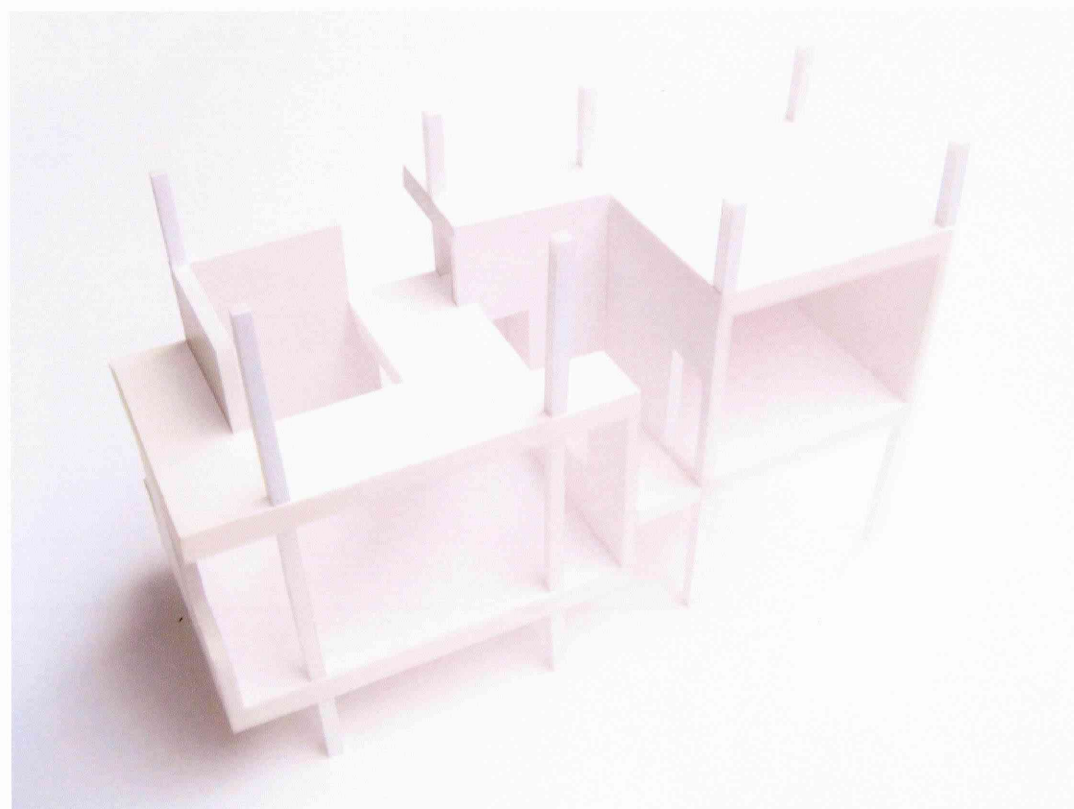


その含みを共有するように全体を構成していく



## 1 - 2 - 2 部屋に対する3つの空間の要素

今回のプログラムはオフィス空間である。仕事をする場として、多くの時間を過ごす、専有空間である個室側であっても、箱の中に閉じ込められているような状況は避けたい。  
そこで上下左右に含みを設けたことで生まれる3つの空間的な要素をあげる。

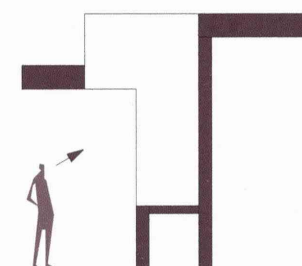


基本空間モデル



A. 奥行きの増幅

部屋の内側の面は、隣の部屋の壁まで延長し、奥行きが増幅する。



天井+壁の2面を使った開口

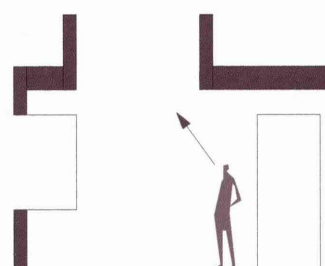
1 - 2 - 2 部屋に対する3つの空間の要素



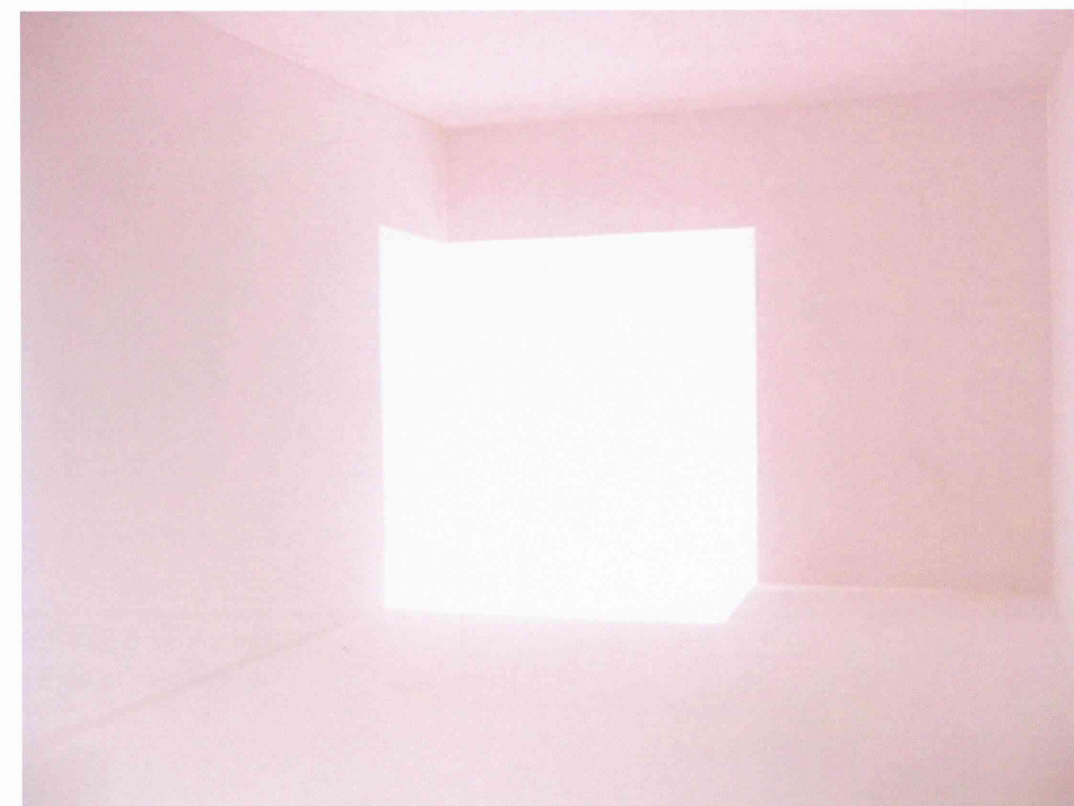
B. 高さの変化

上部に開口を開けることで、一室の中に天井高の変化をつける。

手すり部分の腰壁とも面として連続させることで、吹き抜け部も見える位置によっては、そこに空気の塊をつくることができる。



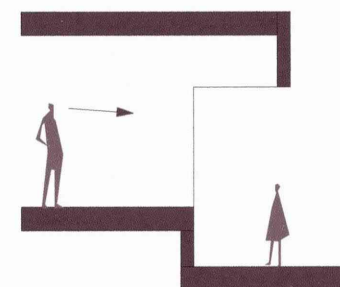
天井面を使った開口



C. 相違する2層の中間領域

レベルの異なる層の中間領域として、下の層まで覆う開口。

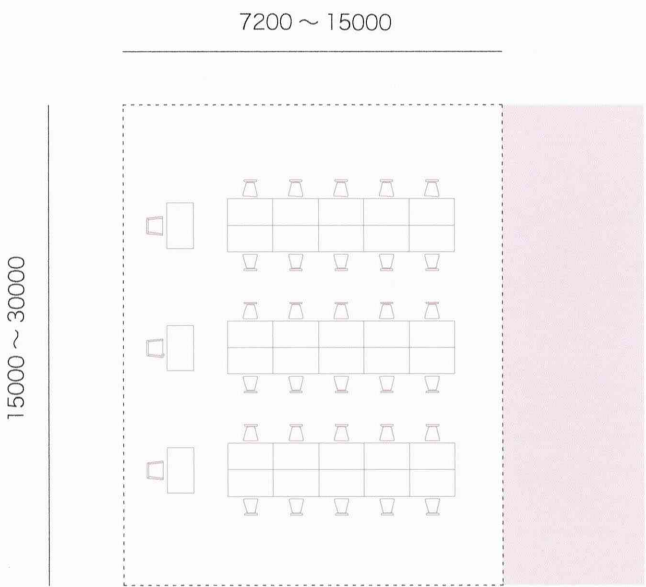
上図の場合ではキューブ状の空気の輪郭ができる。



床面+壁2面を使った開口

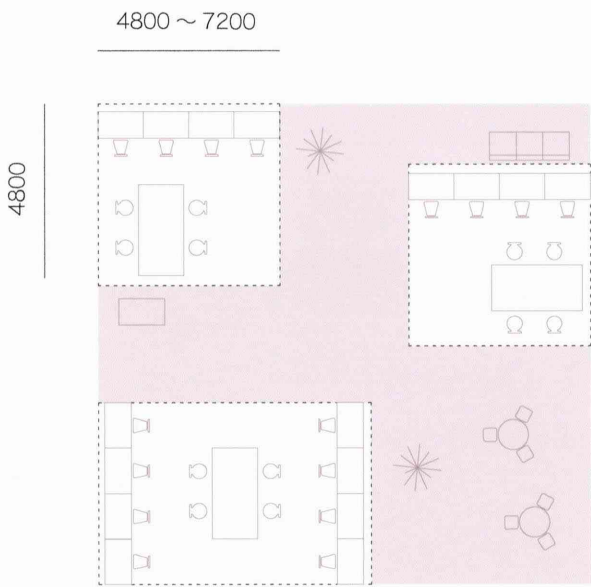


1 - 2 - 3 オフィスとしての適用



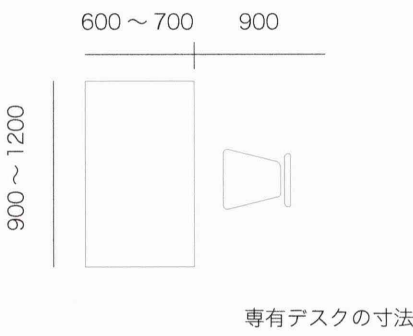
中高層ビルで一般的なワンルーム型

コアをどこかに寄せ、共有部もそのコア側に集中する。



提案する分散型

もう少し小さな規模のオフィスの一部屋のサイズを参照し、親密で集中できる専有部屋を分散し、その間の空間を共有部として使う。



共有部

- ミーティングルーム
- 本棚
- コピー機
- 給油室
- 商談・応接間
- リラックス・コミュニケーションスペース
- 作業テーブル

+

会員が利用できるタッチダウンスペース（IDデスクトップ、ロッカー）

1 階・地下

カフェ・ショップ・イベントホール・公園・ベンチ 等が配置される

ここまで述べてきた空間のシステムをオフィスとして適用する。

デスクが並ぶ従来のワンルーム型に変わるものとして、現在では、専有空間はなく、どこでも、自分のノート PC を使って、またはデスクトップ PC に ID を打ち込んで、作業するフリーアドレス制のオフィスも出てきている。

しかし、自分の経験からも、専有のデスクや部屋はあった方がよく、気分転換に違う場所で作業をするようなスタイルが最適であると考えた。

個室型とフリーアドレス制の両方の要素を兼ね備えたシステムを提案する。

|  |                                                                                                |          |  |
|--|------------------------------------------------------------------------------------------------|----------|--|
|  | Chapter 1                                                                                      |          |  |
|  | <div>設計内容</div> <div>PLAN</div> <div>SECTION</div> <div>ELEVATION</div> <div>PERSPECTIVE</div> |          |  |
|  |                                                                                                |          |  |
|  | Master Thesis Outline of the Air - Developoment of RAUM Plan -                                 |          |  |
|  | 空気の輪郭ーラウムプランの新たな展開ー                                                                            | page 020 |  |



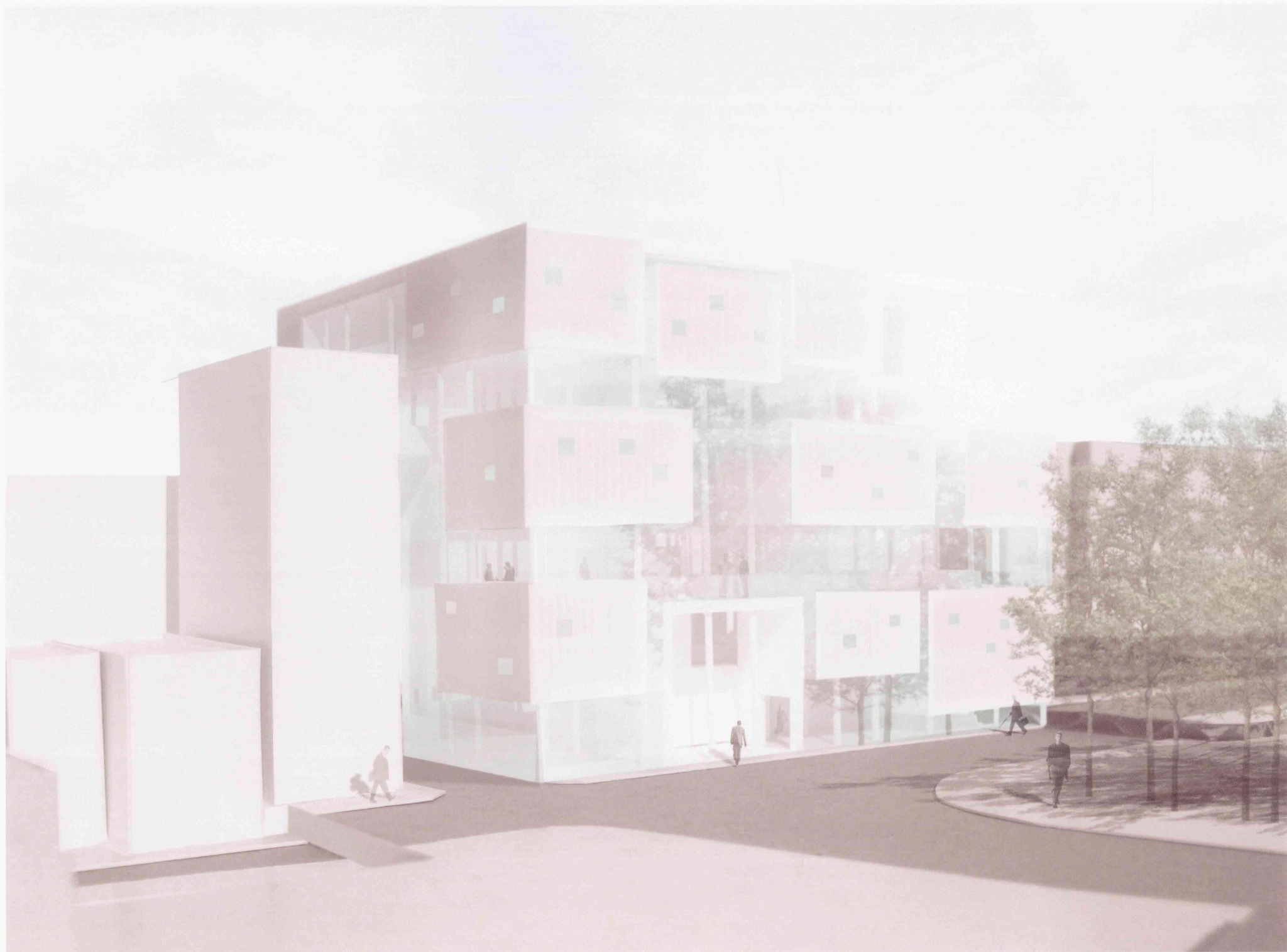


屋根は各階の平面図と同じように BOX が突き抜けている部分とトップライトが立ち上がる部分が出する。

SITE PLAN + ROOF 1:300



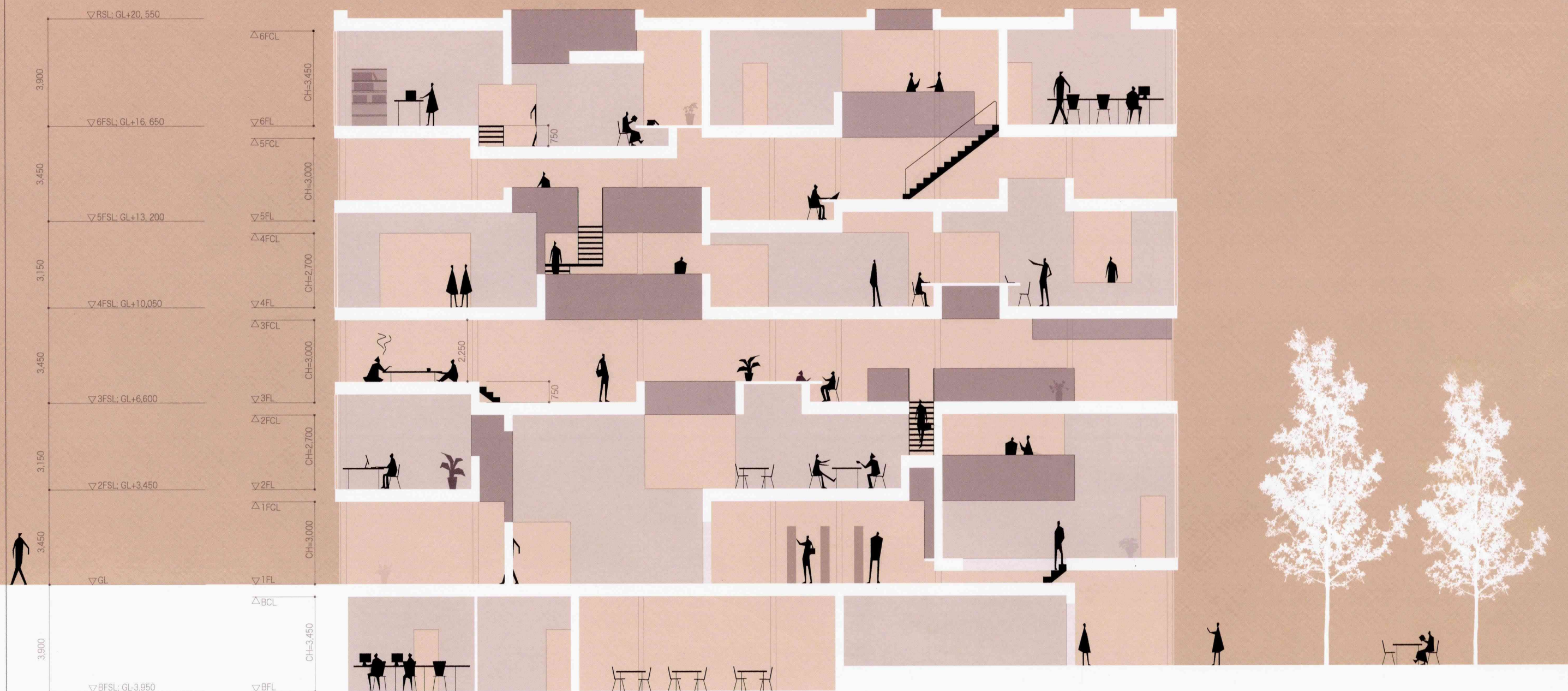




東側正面ファサード、BOX のファサード側は半透明のガラスで囲われる。全体の構成をわかりやすくしシンボリックな外観となる。昼間は隙間の透明ガラスの部分は光や景色を反射するが、夜は逆に中の活動が浮かび上がる。

PERSPECTIVE



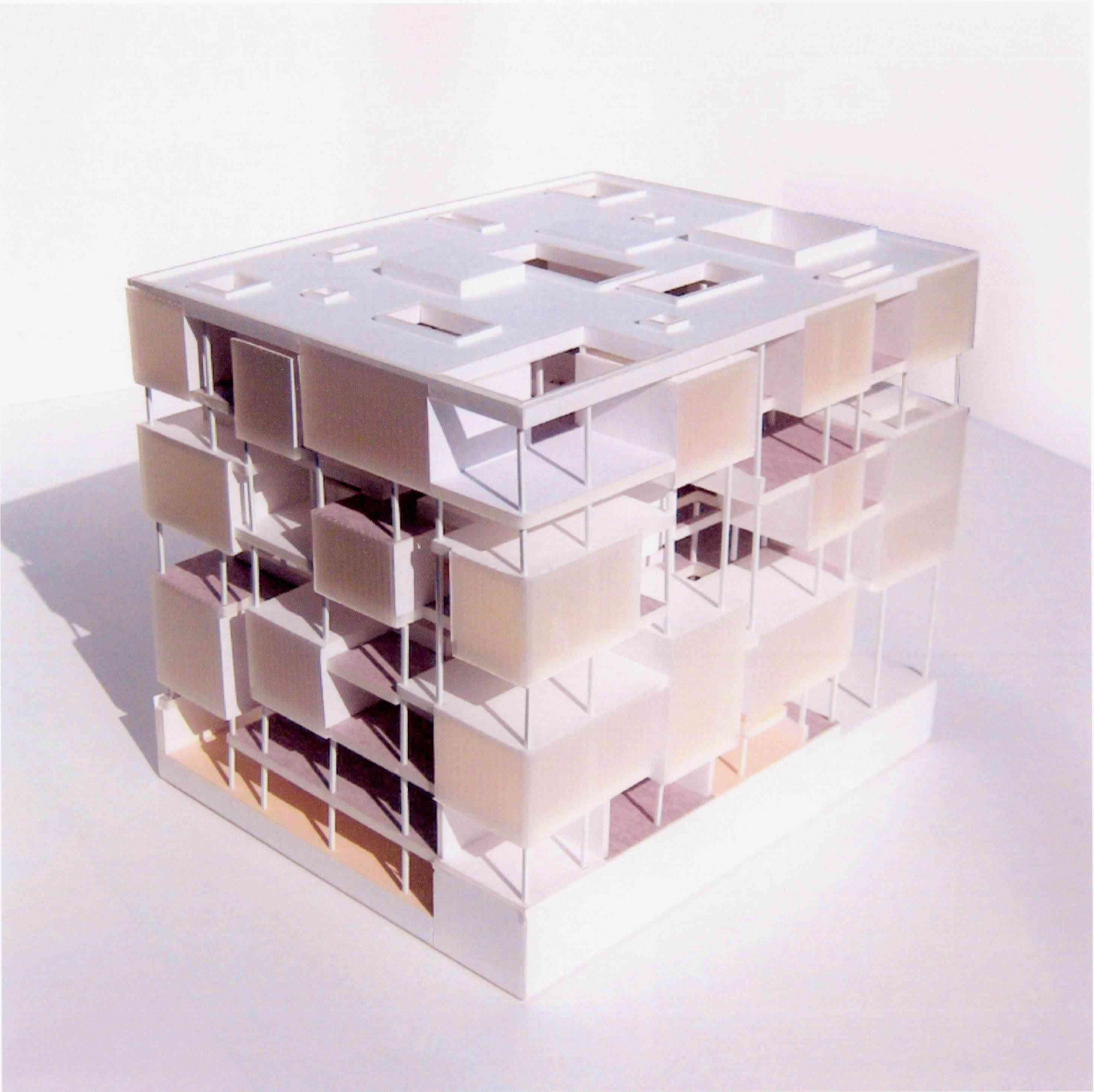


ファサードはBOXの構成がそのまま外側に露出しているが、内部では面が連続していき、オフィスの部屋としてのヴォリューム感は維持されつつも、BOXは解体されている。  
またレベル差を利用して、様々な人の行為を誘発する。

## SECTION 1:150



全体構成

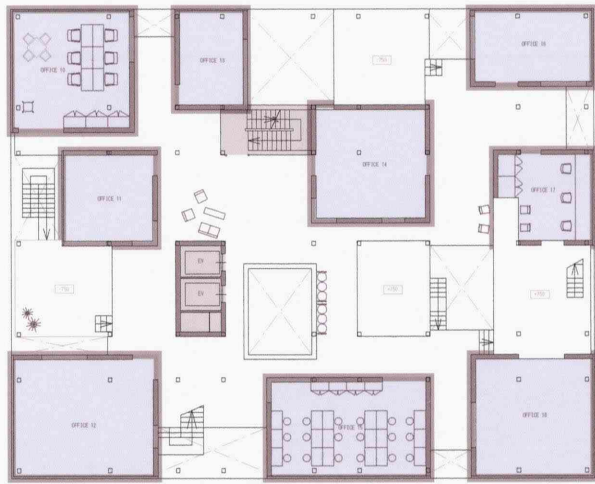


各部屋を切り離し、「含み」をもたせて、一つのヴォリュームの中におさめる



5F PLAN

奇数階では基本的に下の階の BOX が視線の高さよりも低い位置まで立ち上がるだけで空間が仕切られ、視線の抜ける空間になっている。  
ここは会員ならだれでも使えるフリースペースになっており、750mm まで立ち上がった下の階の天井スラブが大きなテーブルとして使われたり、天井高の低くなったその上にリラックススペースやミーティングルームが配置されている。

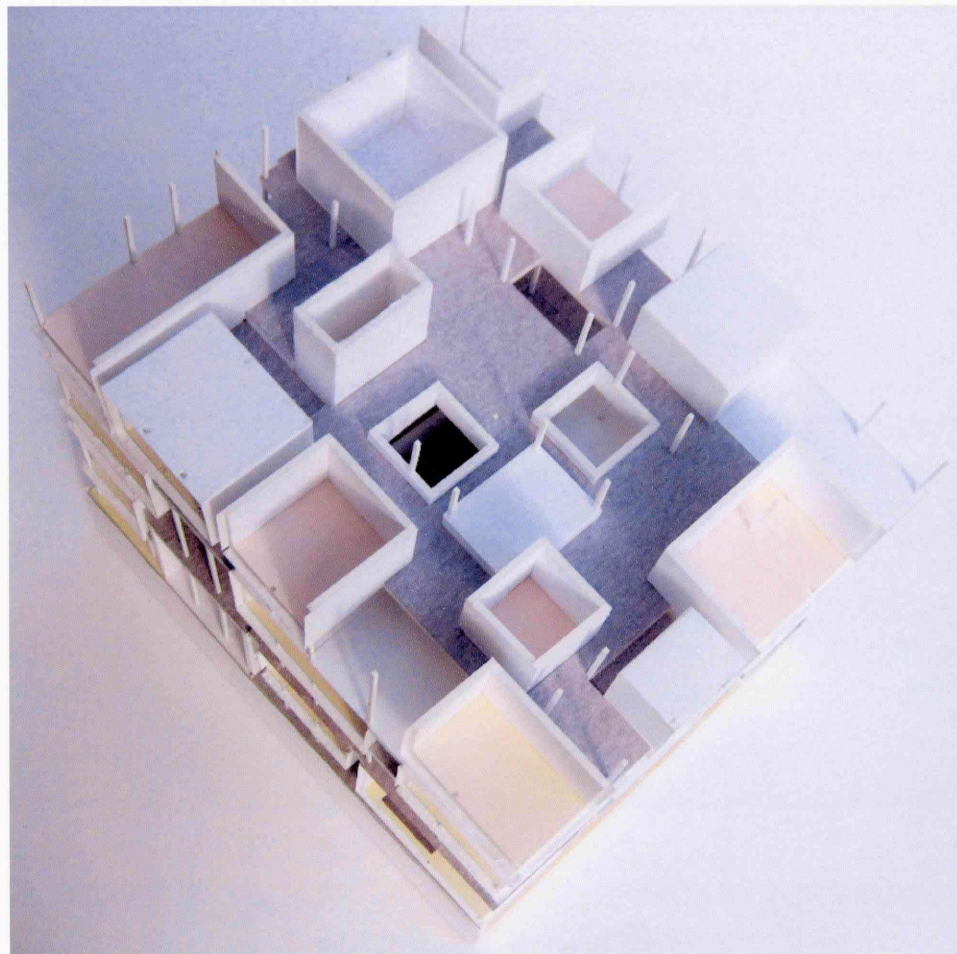


4F PLAN

偶数階には専有オフィスが点在し、その隙間の共有部は、誰でも通ることにはできるが、隣接するオフィスの共有部となる。  
狭い隙間の方は部屋へのアプローチとして利用する場合もあれば、開口を開けて奥行きを増幅する猶予空間として利用することもある。

構造は、柱 □=200×200 梁 H=200×200 で梁の位置がスパンごとにずれる場合のある、柱と梁がアミダ状になった鉄骨ラーメン構造。  
基本的に、動線はエレベーターと直通階段が着く基準フロアからそのまま行けるか、750mm～900mm 上がるか下がるかしてアクセスすることができる。  
直通階段の他にレベル差を利用した上下動線が点在する。





偶数階は部屋の BOX が、散りばめられた空間。ラウムを意識した開口部の連続する面が、互いを柔らかくつなぐ。  
BOX の隙間の含み部分は、その隙間に隣接する部屋の共有部（空間的にも機能的にも）となる。

3つの空間体験 A. 面の空間

Master Thesis Outline of the Air - Development of RAUM Plan -

空気の輪郭 - ラウムプランの新たな展開 -

page 025





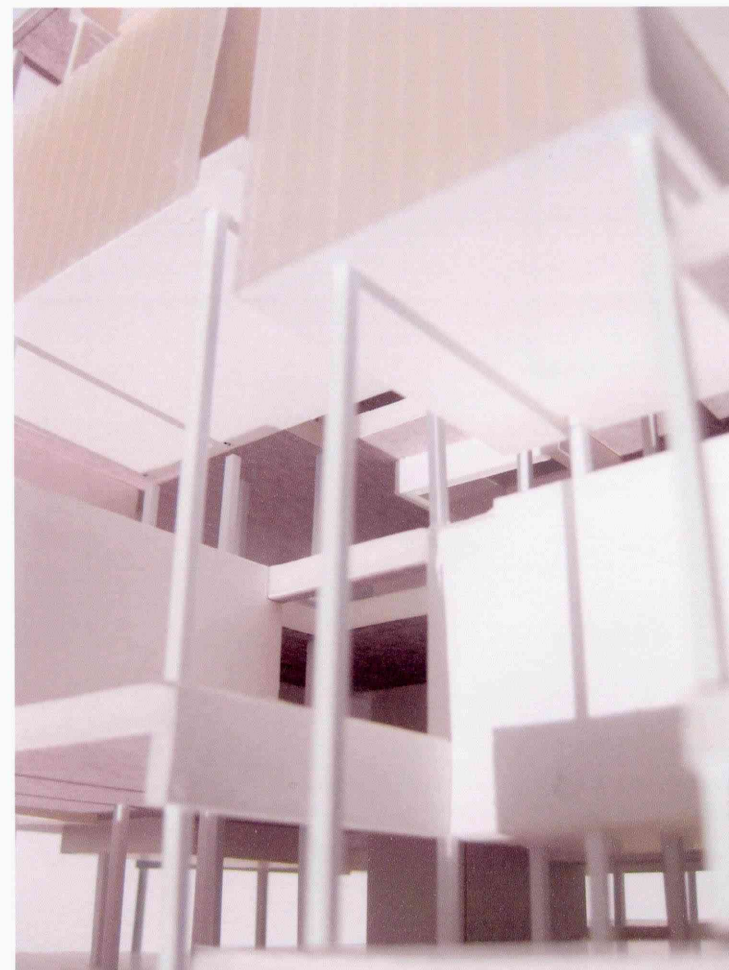
全体の中でメリハリをつける意味でも、奇数階では上下の階のオフィスのBOXが突出するだけのほぼ壁のない柱の空間になっている。この階は誰でも使える共有スペースとなっており、天井高の低いところや、少し高くなった場所や明るいところなど視線の通る広い空間の中に多様な場をつくる。

### 3つの空間体験 B. 柱の空間

Master Thesis Outline of the Air - Developement of RAUM Plan -

空気の輪郭 - ラウムプランの新たな展開 - page 026

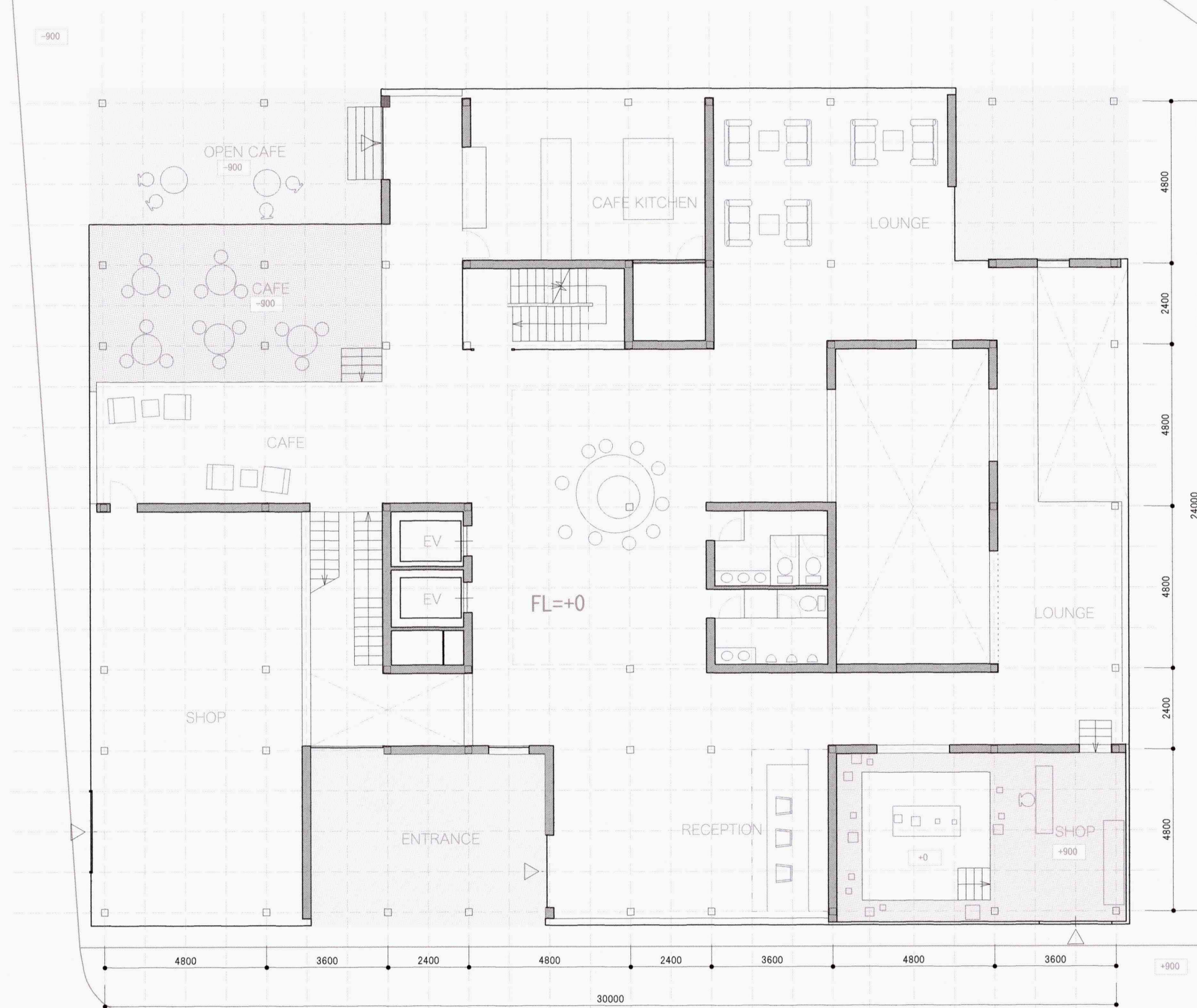




吹き抜け部分や、外側の BOX の間の空間では、BOX の外側の面がつくり出す空気の輪郭が知覚されるヴォイド空間である。  
また、レベル差を利用した上下移動時には、外の景色ともあいまってその関係性をより明白に感じ取ることができる。

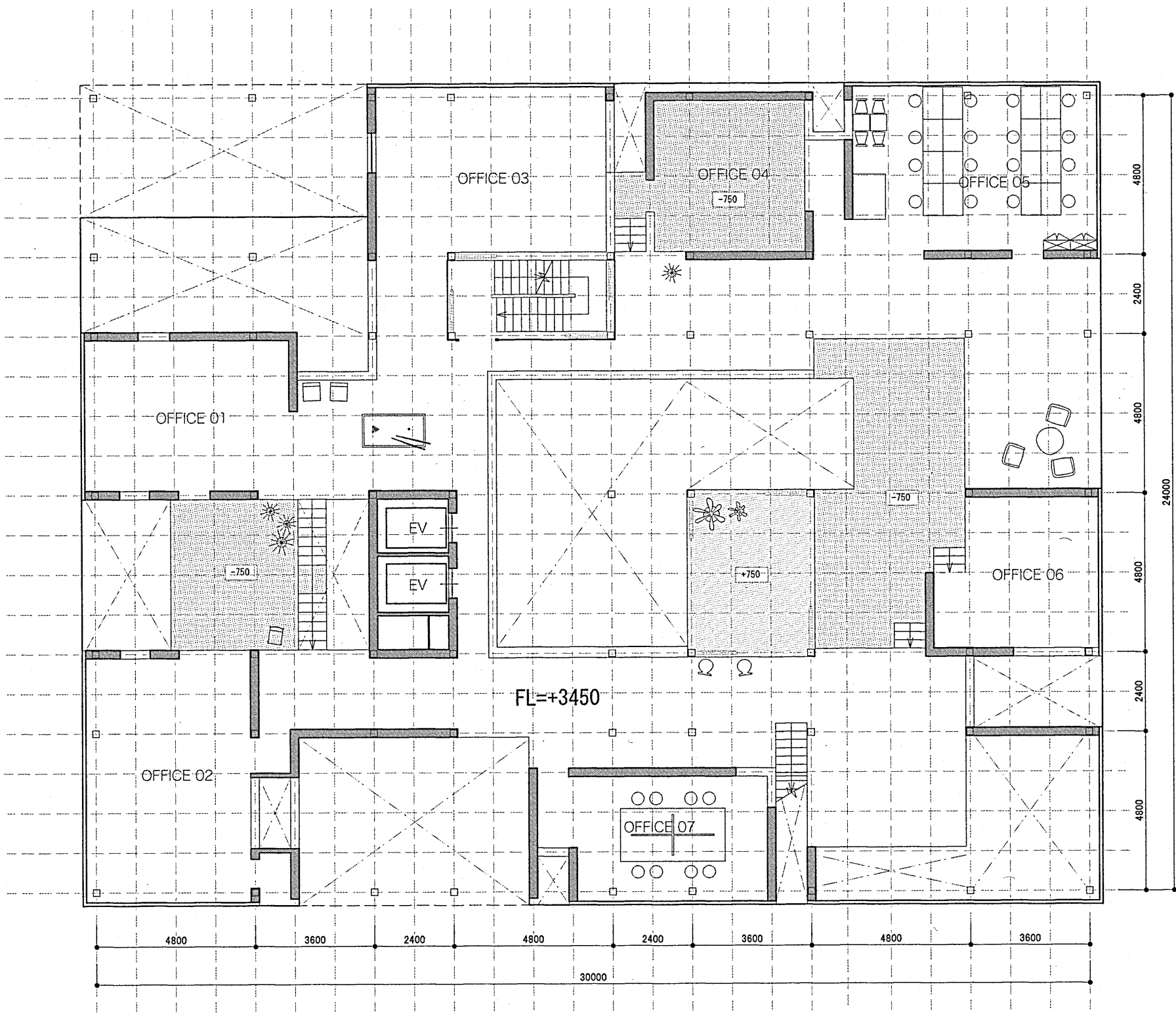
### 3つの空間体験 C. 上下の移動





1 階は、独立したエントランスをもつ2つの店舗と、カフェが入る。地形の高低差を利用して、それぞれにエントランスを配置する。オフィスの待合スペースとカフェのいすやテーブルは共用して使う。

1F PLAN 1:150

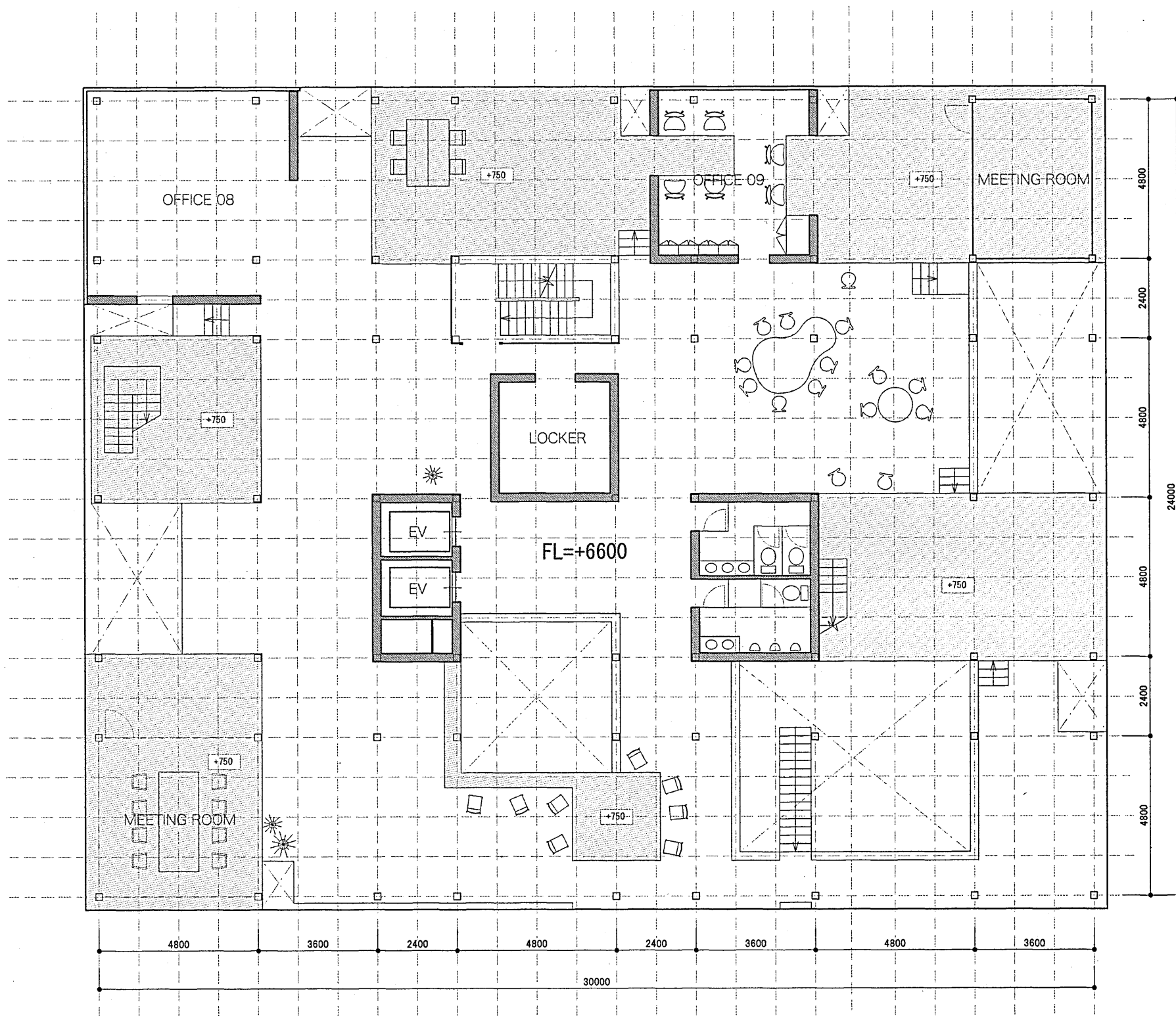


2階からオフィスとしての個室が置かれる。1社がまとめて数個のオフィスを借りる事もある。  
ガラスで囲った直通階段室、トイレ上部（750mm上がったところ）には、ブレースが露出してくるが視線は通す。

2F PLAN 1:150

12

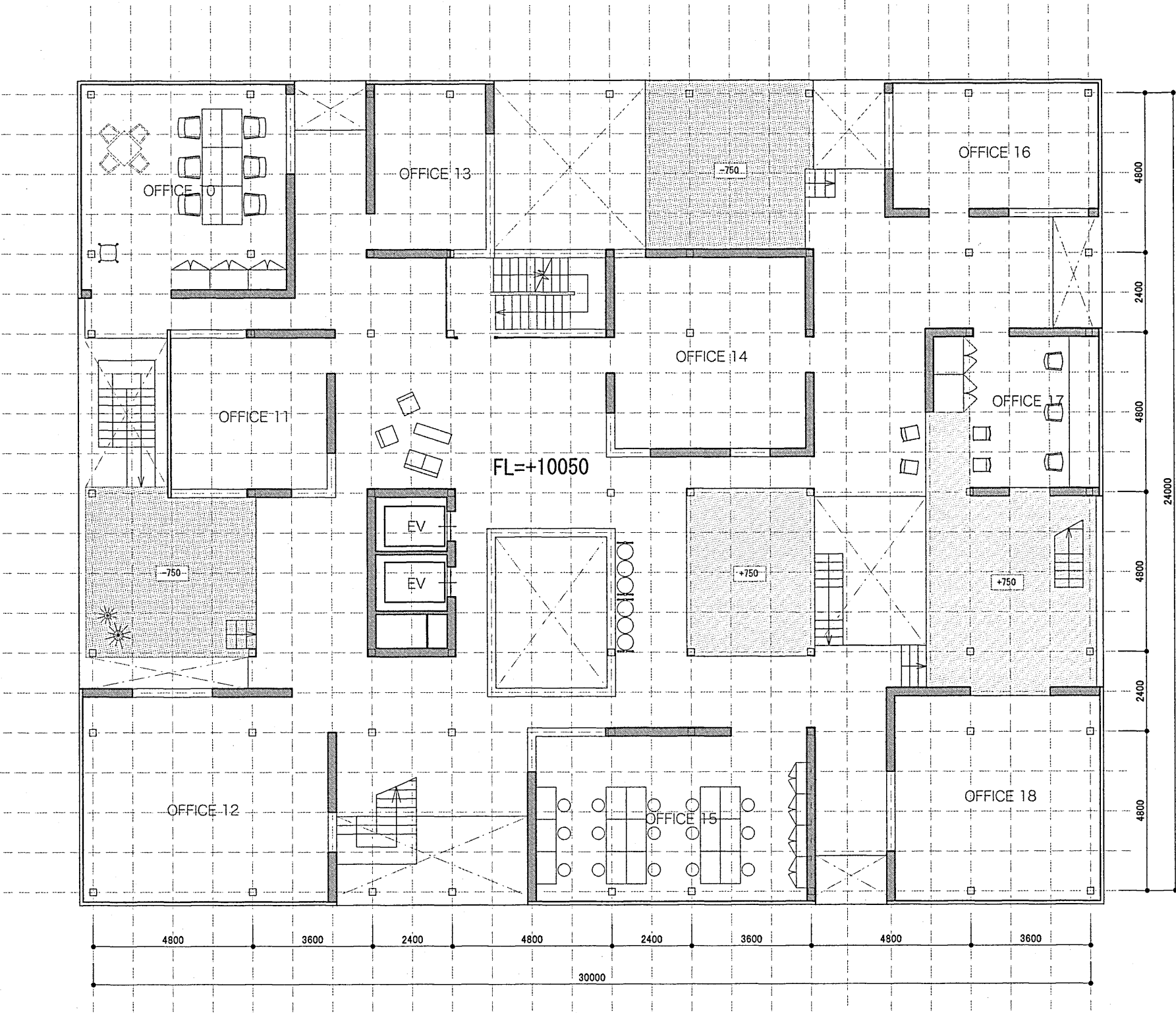




奇数階は下の階の天上高の高いBOXが突出しただけのほぼ壁のない視線の抜けるワンルーム空間になる。

3F PLAN 1:150

2

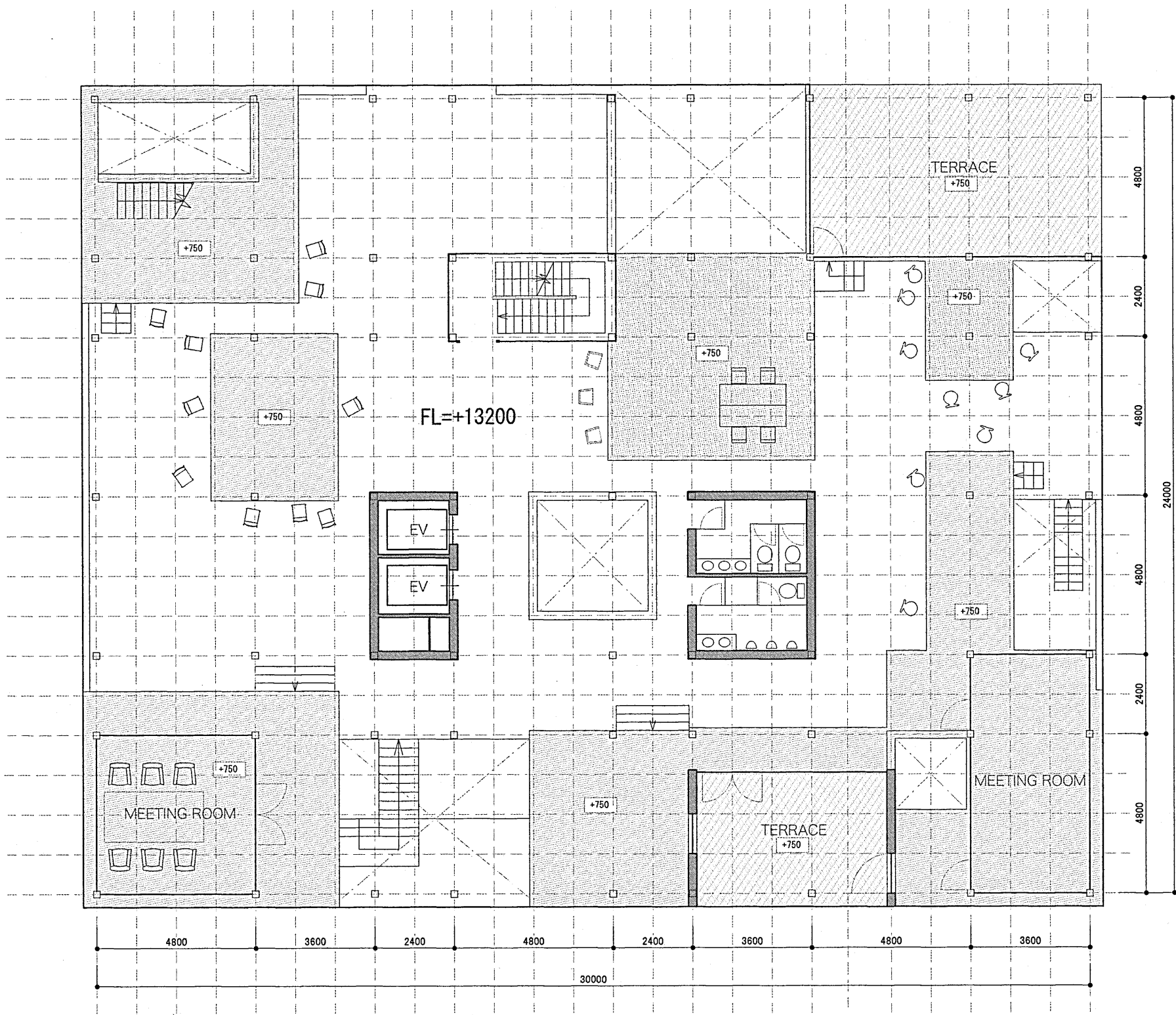


ほぼ一層おきに、専有個室が配置される。  
直通階段以外にも上下階に移動する階段がありレベル差のあるところは広い踊り場のような空間になる。

4F PLAN 1:150



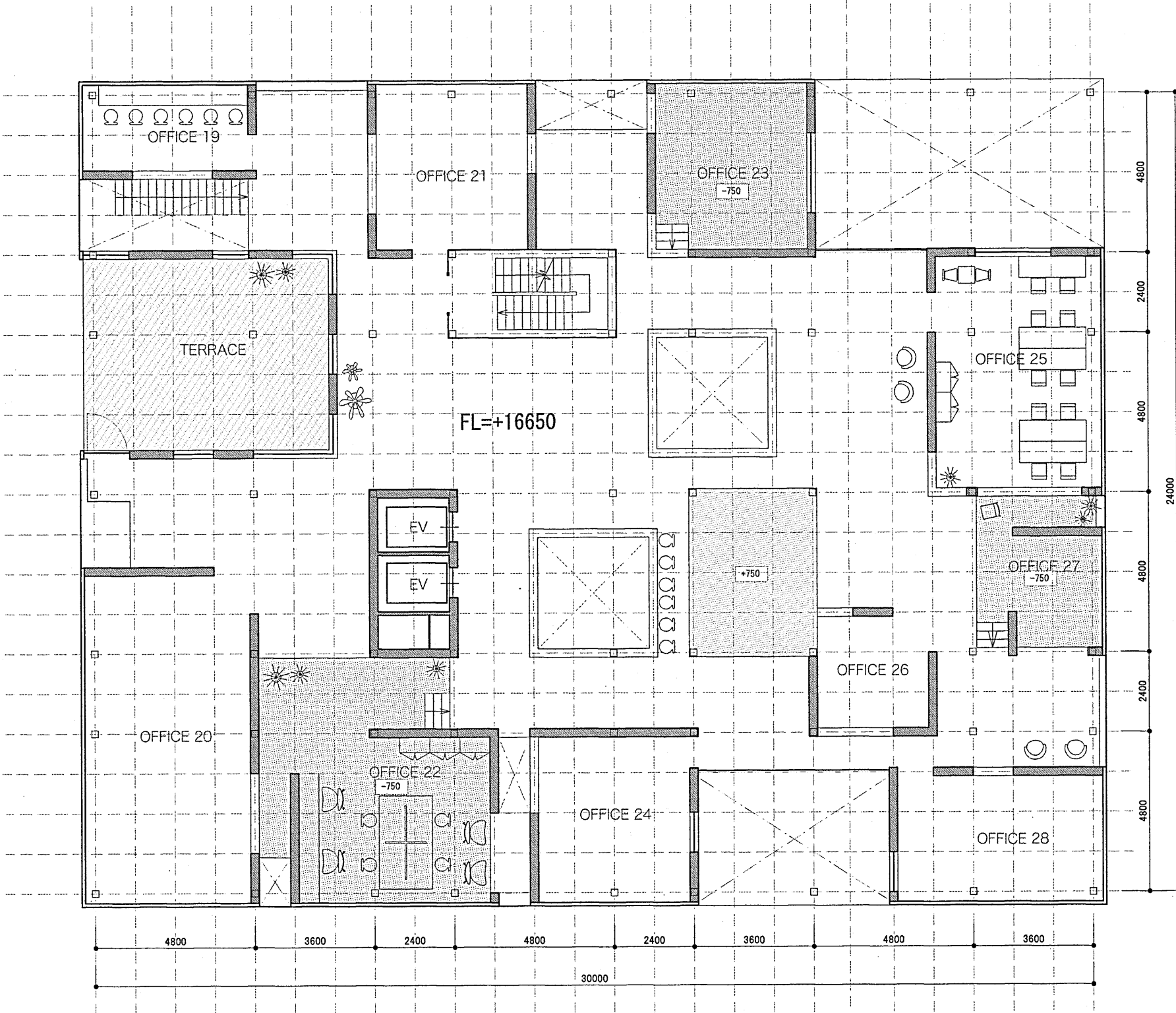




下の階の BOX が突出した部分は、タッチダウンスペースとして誰でも利用することの出来るテーブルになったり  
その上にミーティングルームやリラックススペースが置かれる。

5F PLAN 1:150

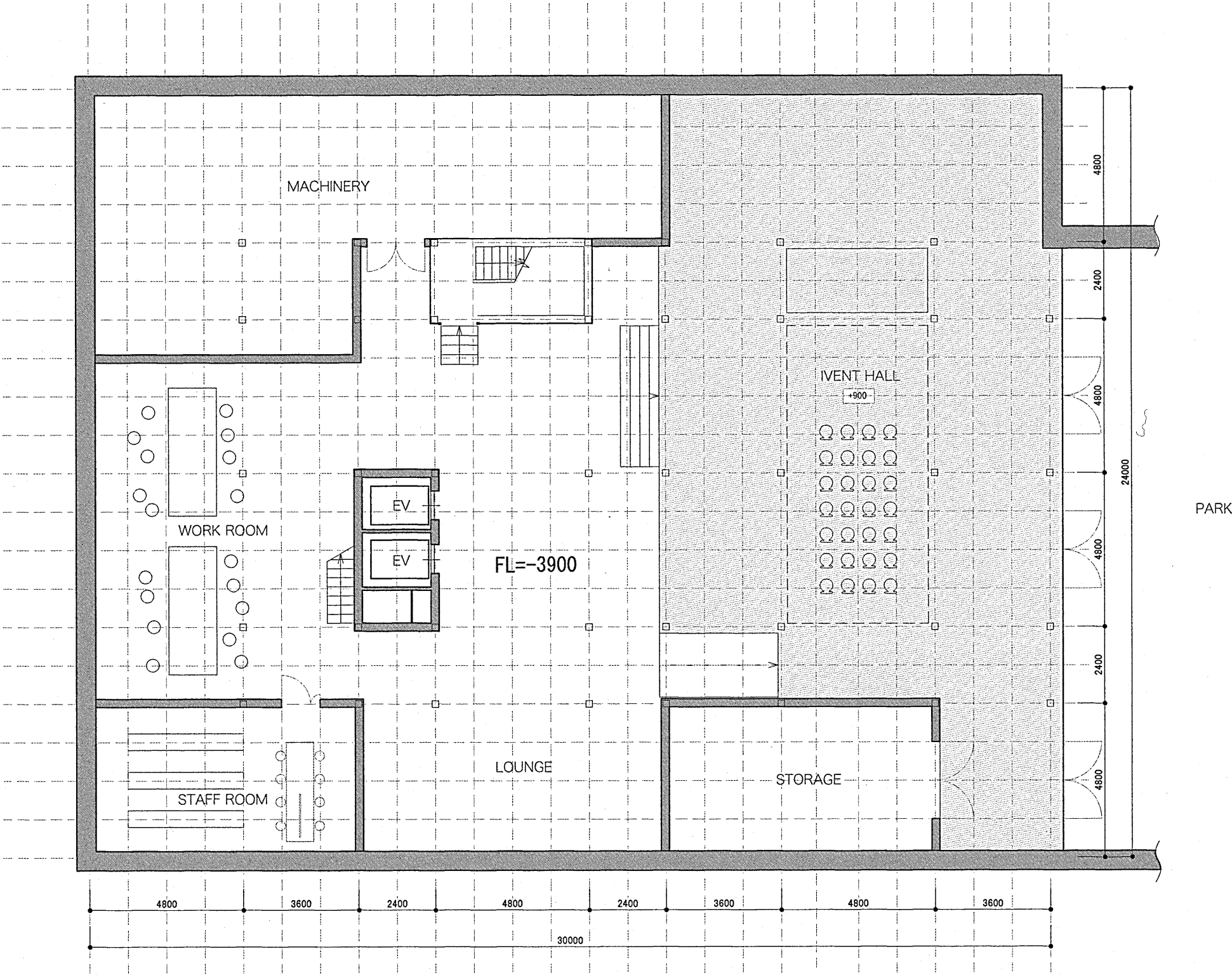




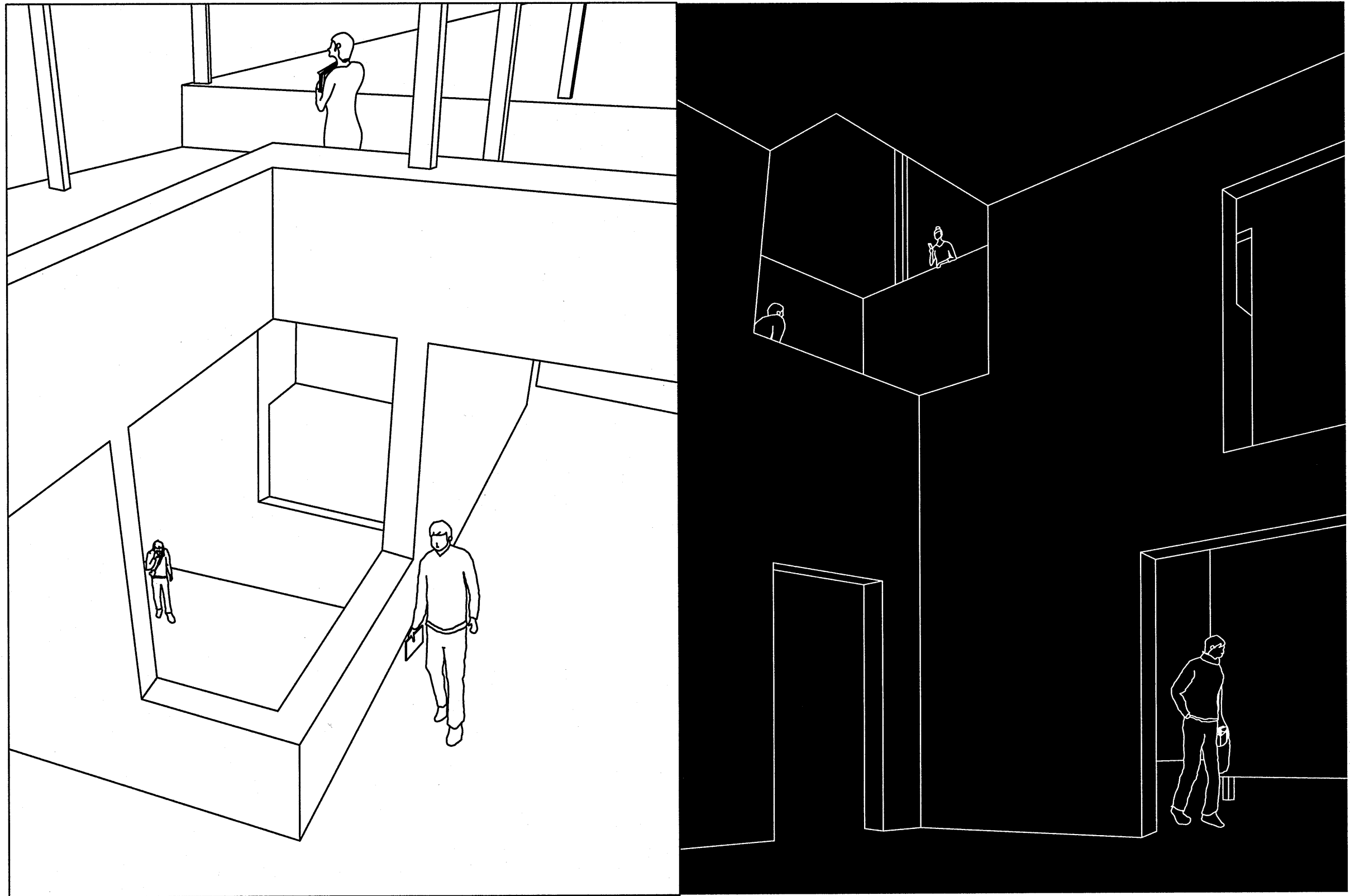
最上階は空へ抜けるトップライト部分に空気の輪郭が現れてくる。

6F PLAN 1:150





地下では、北側において GL-3000 レベルまで掘り下げられた公園とイベントスペースが接続する。  
他には、共用ワークスペース、店舗や 受付の為のスタッフルームを配置する。



白：3階から見下ろした場面 黒：1階からそこを見上げている場面  
この二者の間には空気の輪郭が存在し、それが二つの場所をつなげている。



空気の輪郭をデザインした内部空間



すき間（含み）をもたせて BOX を組織することで開口をコントロールすることができる。

共有部からオフィス内部へのアプローチ

空気の輪郭をデザインした内部空間



オフィスの部屋に隙間からの光を取り込む

Master Thesis Outline of the Air - Development of RAUM Plan -

空気の輪郭 - ラウムプランの新たな展開 -

page 037



空気の輪郭をデザインした内部空間



部屋と部屋の間の共有部

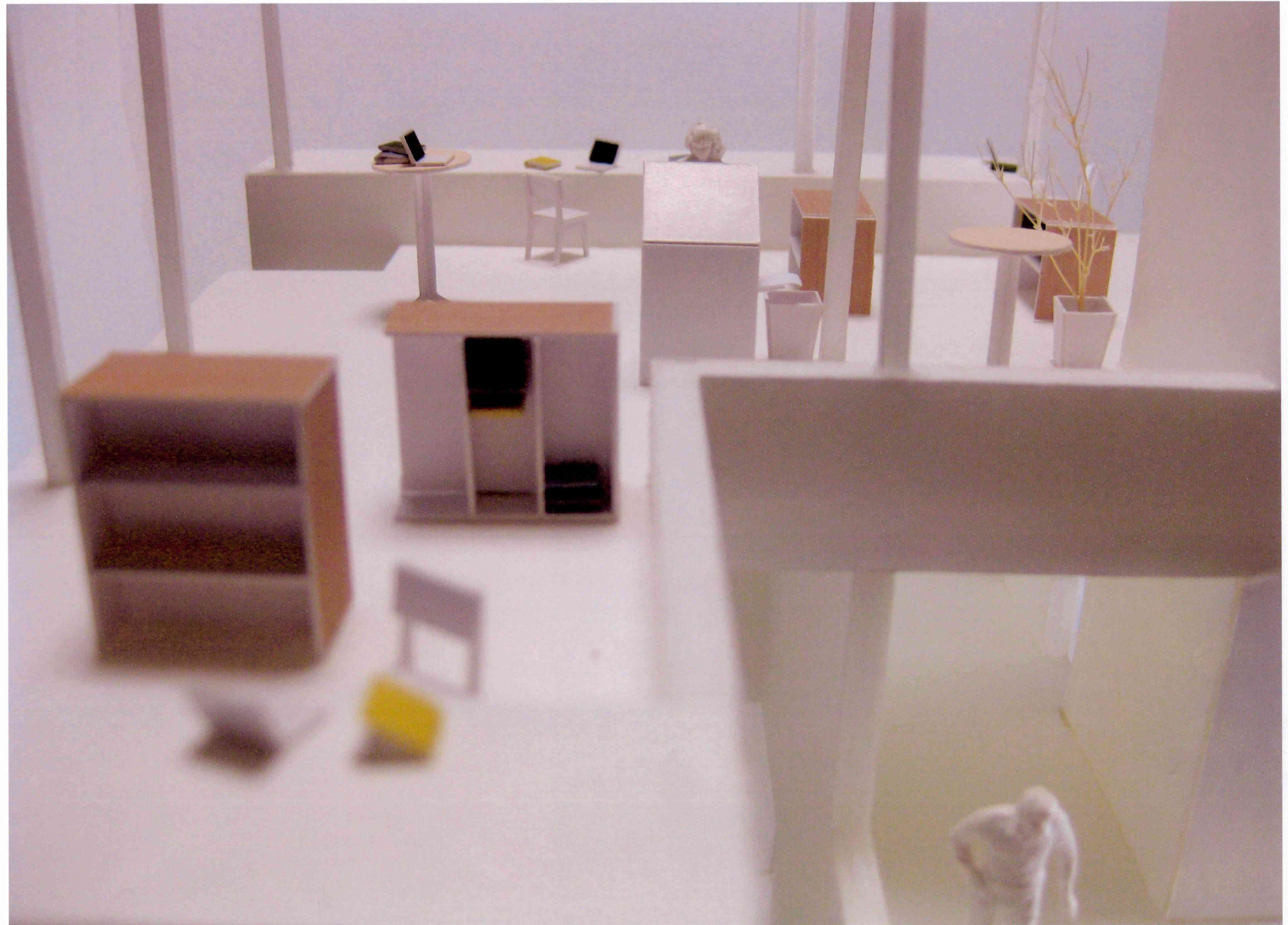
Master Thesis Outline of the Air - Development of RAUM Plan -

空気の輪郭 - ラウムプランの新たな展開 -

page 038



空気の輪郭をデザインした内部空間



奇数階共有部

Master Thesis Outline of the Air - Development of RAUM Plan -

空気の輪郭 - ラウムプランの新たな展開 -

page 039



空気の輪郭をデザインした内部空間



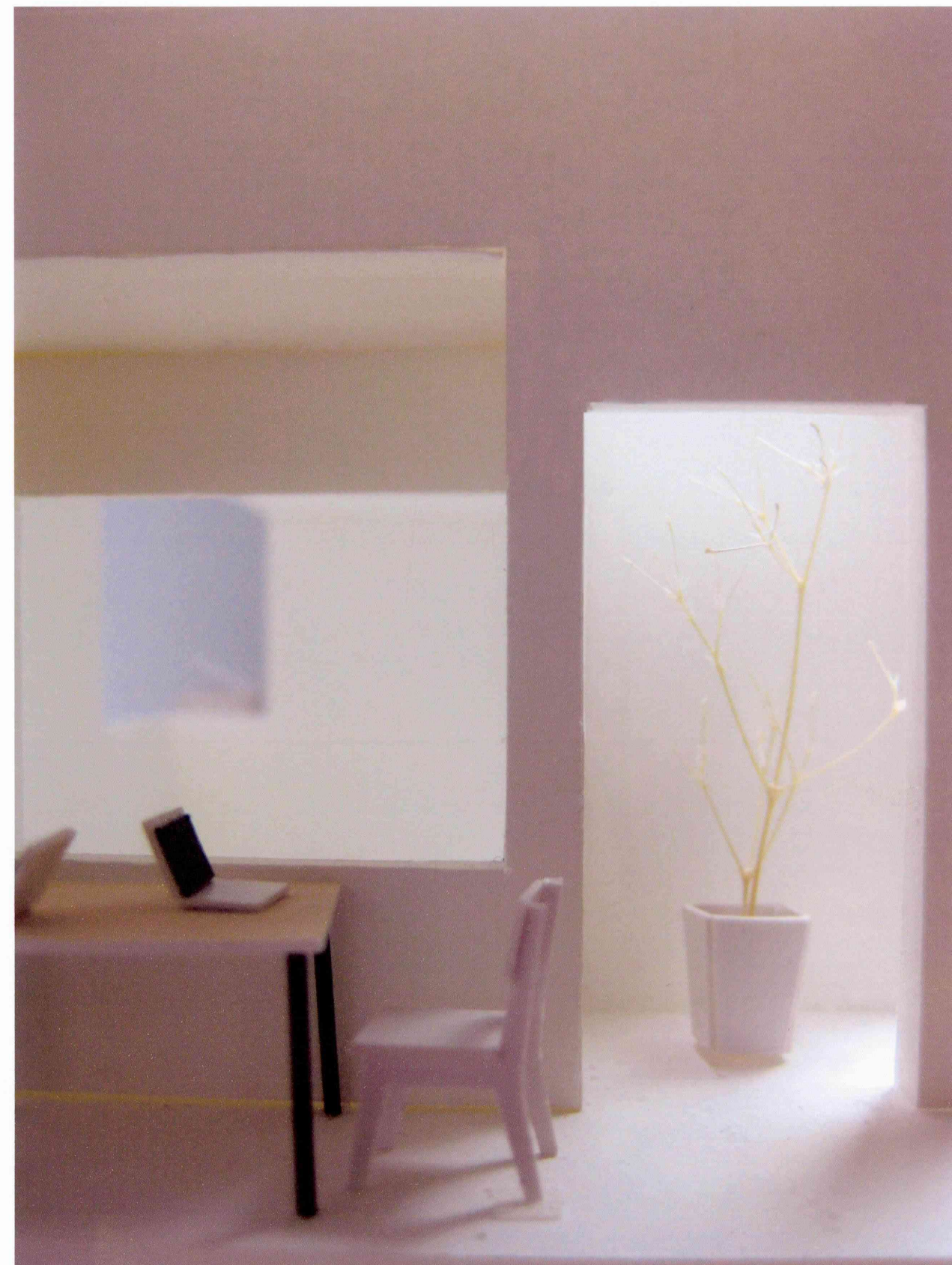
手すりとスラブの厚み分を一体の面にした吹き抜け

Master Thesis Outline of the Air - Development of RAUM Plan -

空気の輪郭 - ラウムプランの新たな展開 - page 040



空気の輪郭をデザインした内部空間



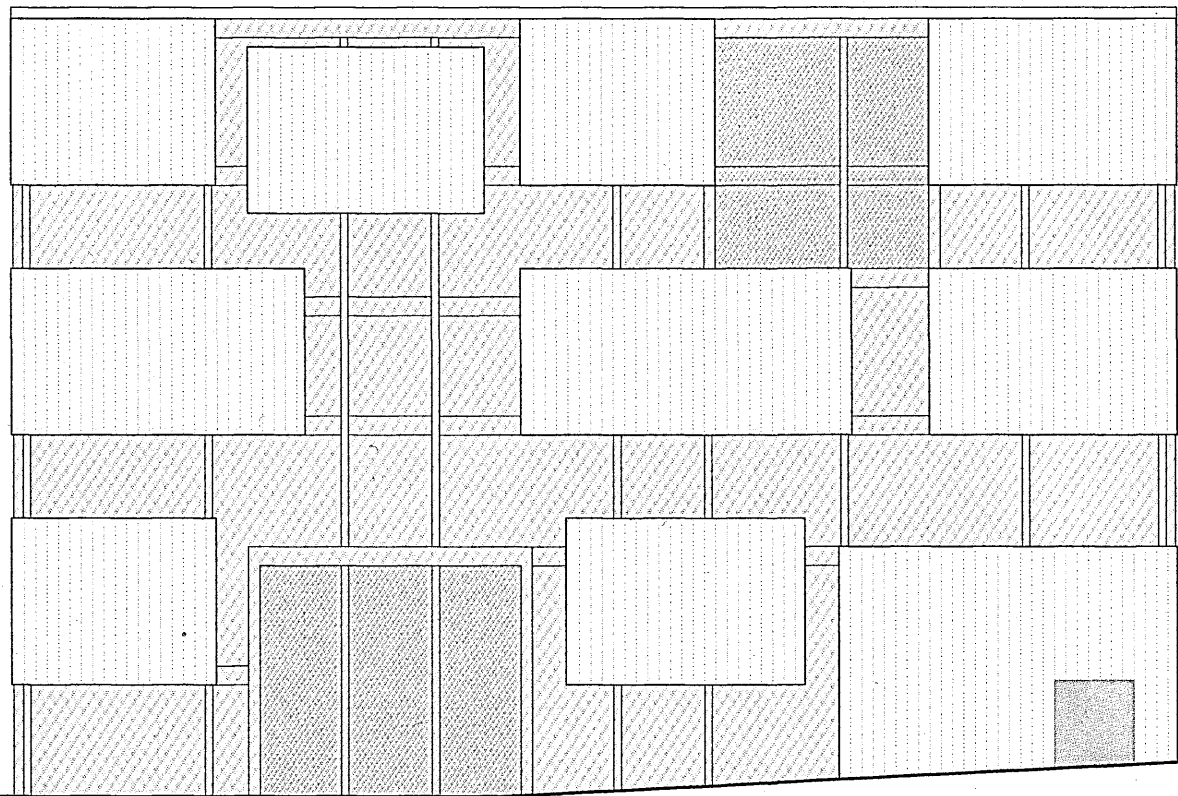
奥行きの増幅

Master Thesis Outline of the Air - Deveropment of RAUM Plan -

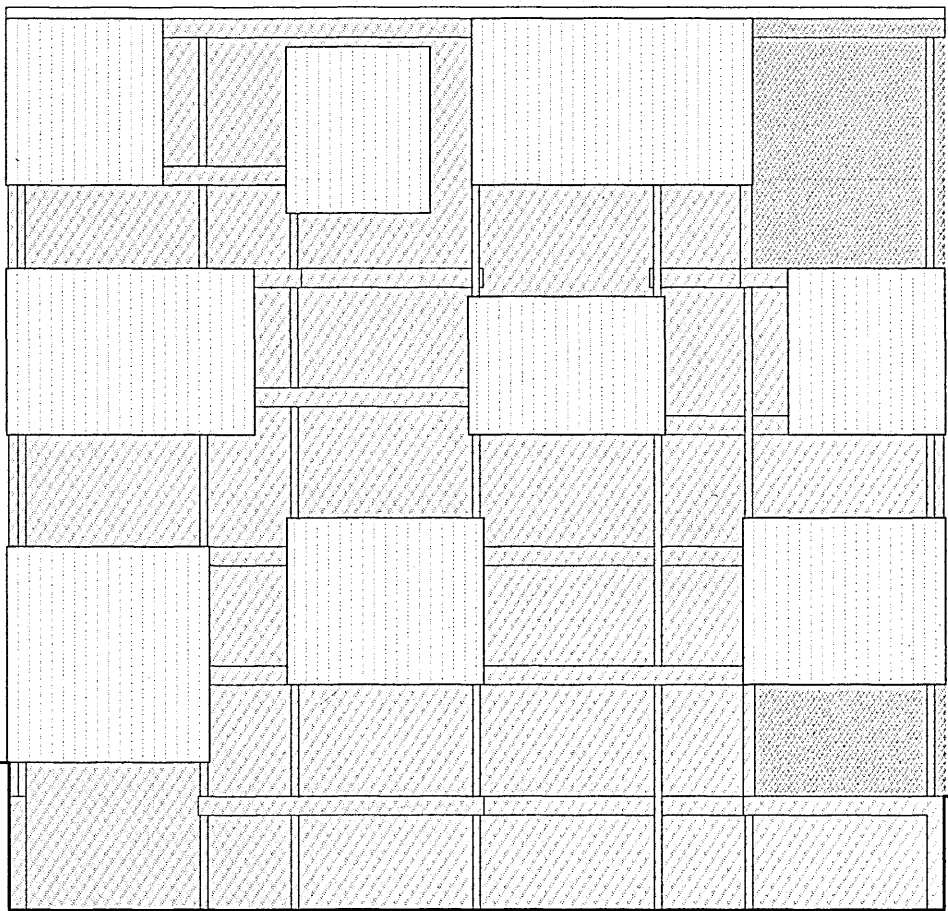
空気の輪郭 - ラウムプランの新たな展開 -

page 041





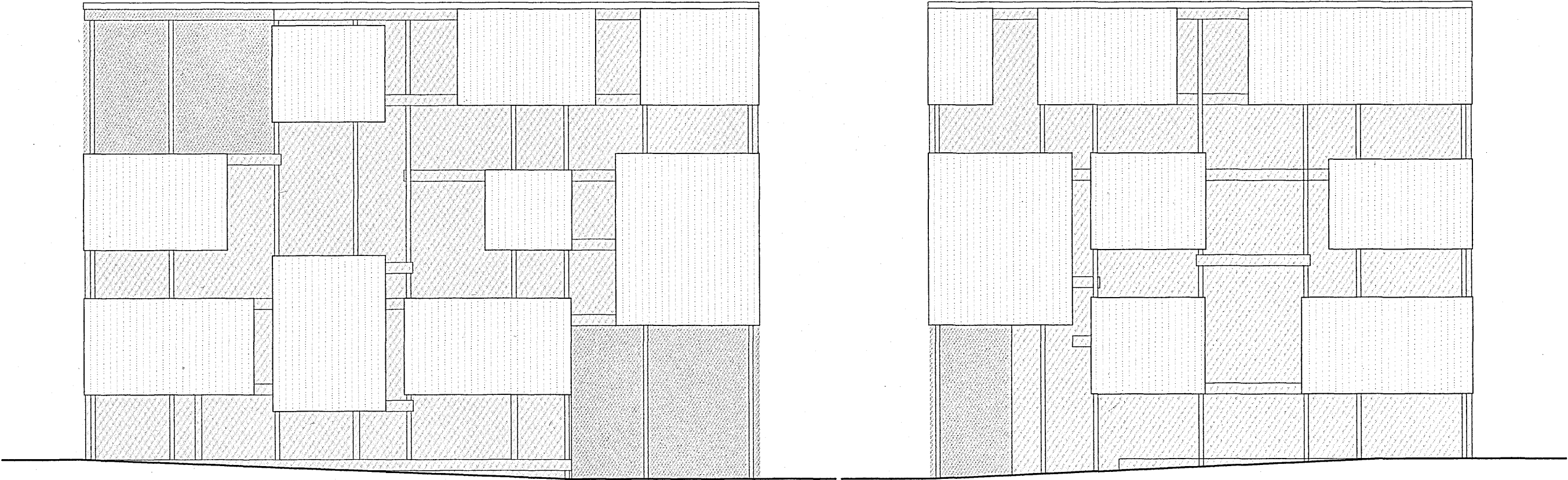
EAST ELEVATION 1:200



NORTH ELEVATION 1:200

内部は開口によってBOXは解体されているが、ファサード側はBOX部分だけ半透明のガラスにすることによって、構成をわかりやすくし、BOXが浮遊しているような外観になる。北側の掘り下げた公園からはほぼ正方形のファサード。

ELEVATION 1:200



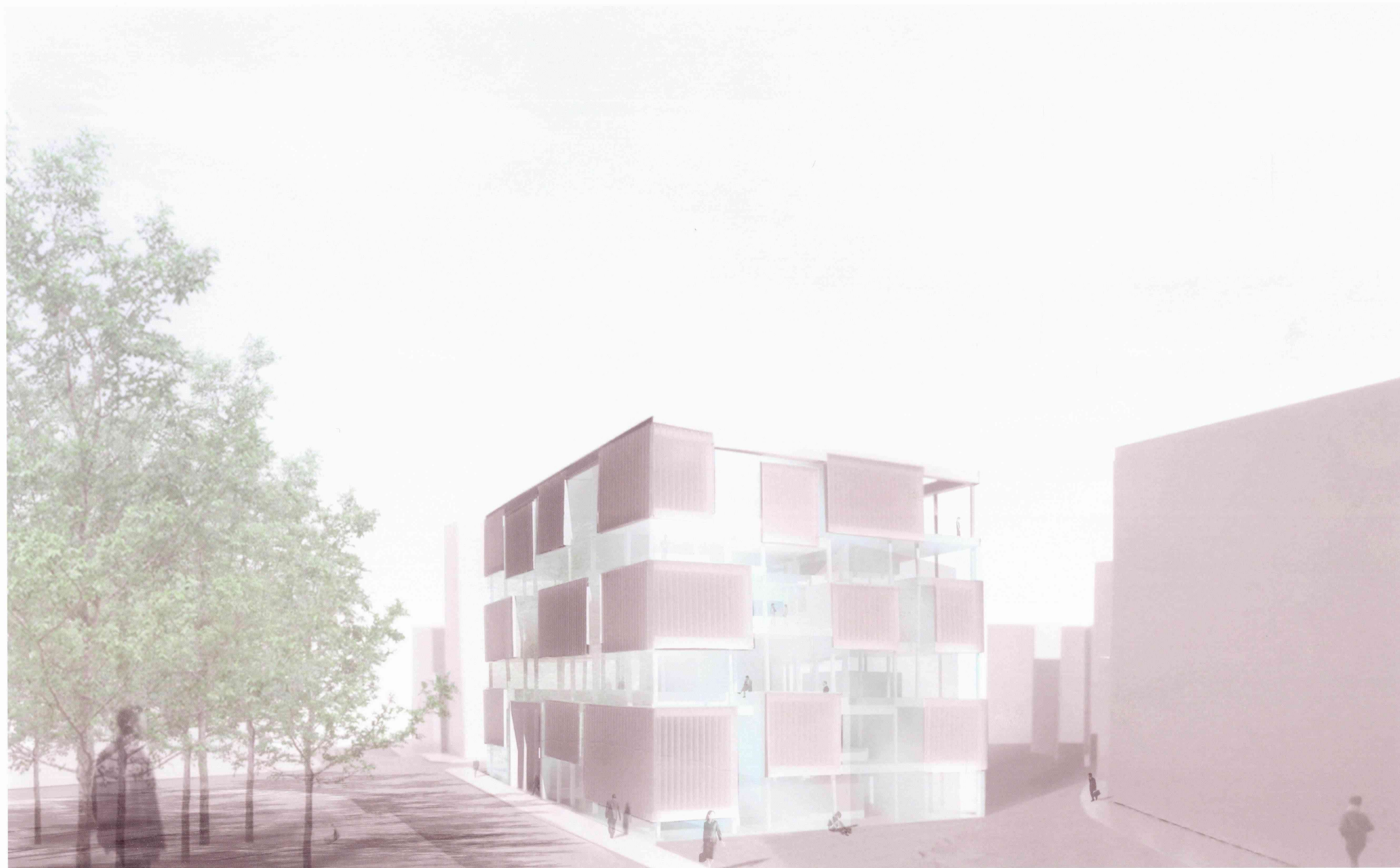
WEST ELEVATION 1:200

SOUTH ELEVATION 1:200

立面断面ともに、比率的に構図が平面図とほぼ同じように見える。平断のヒエラルキーのない状態から考えることでより立体的な空間を目指した。

ELEVATION 1:200



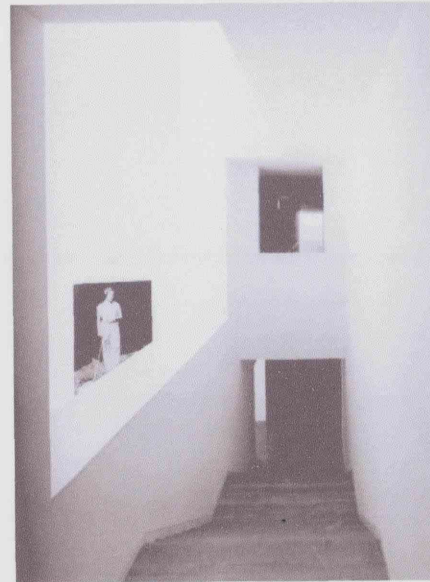


PERSPECTIVE

Chapter 2      第2章 事例研究



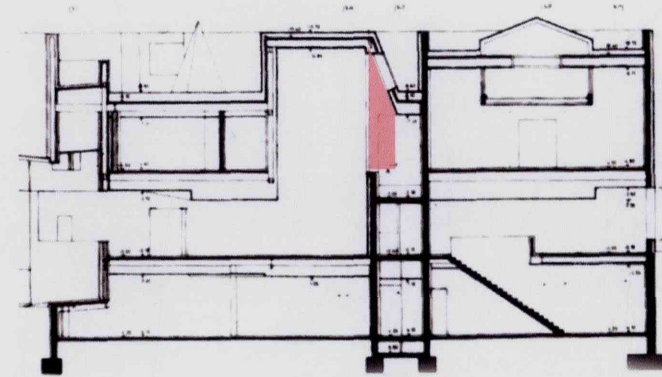
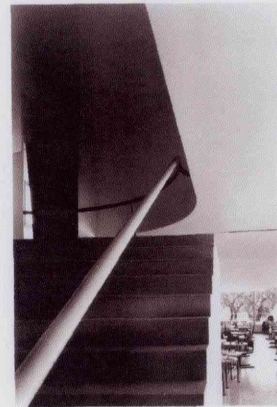
ガリシア美術館（アルヴァロ・シザ）



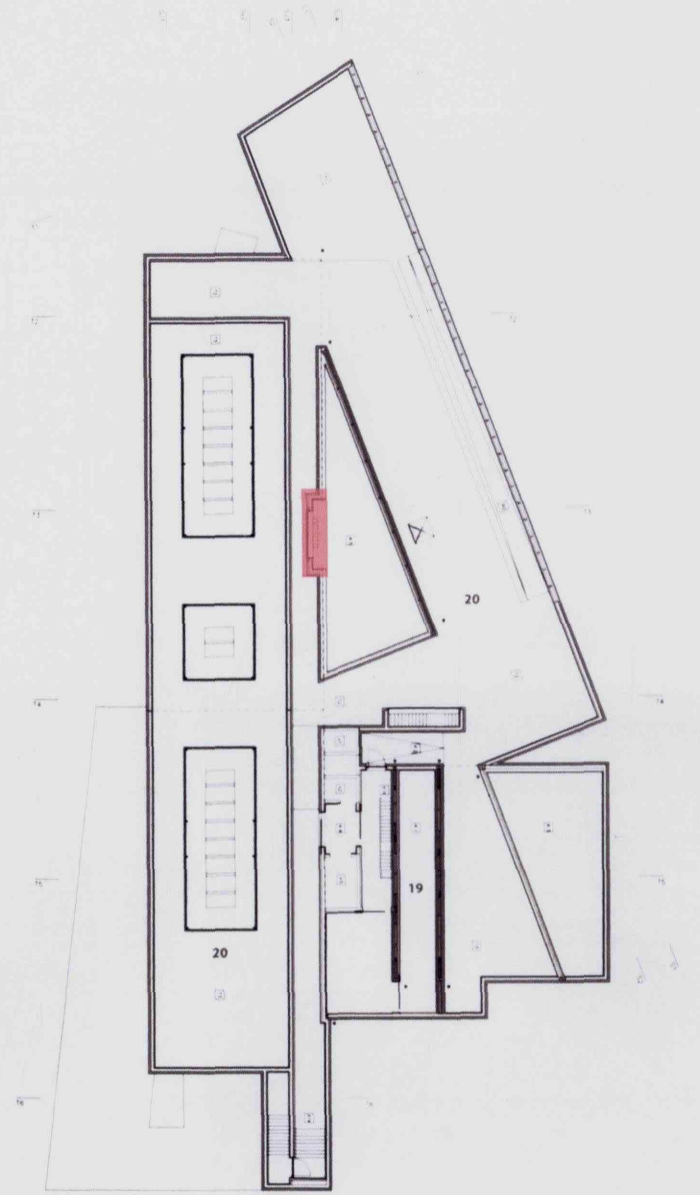
断面図平面図で赤く塗られた部分を異なる視点から見た3枚の写真である。

階段通路部分を挟んで外の光を取り入れている。各箇所から見える空気の輪郭が、互いを間接的に繋ぎ合わせている。

アルヴァロ・シザの作品にみられる空気の輪郭



section



3rd floor plan

シザの作品にラウムプラン的なものを感じたのがきっかけであった。

階段を上げるために天井がその部分だけ抜けていたり、吹き抜け部分も手すりやスラブの厚み分をひとつの面として仕上げることで、面やラインをかたちづくってそこに空気の厚みを感じさせ、次の空間との間にラウムが連続していく。



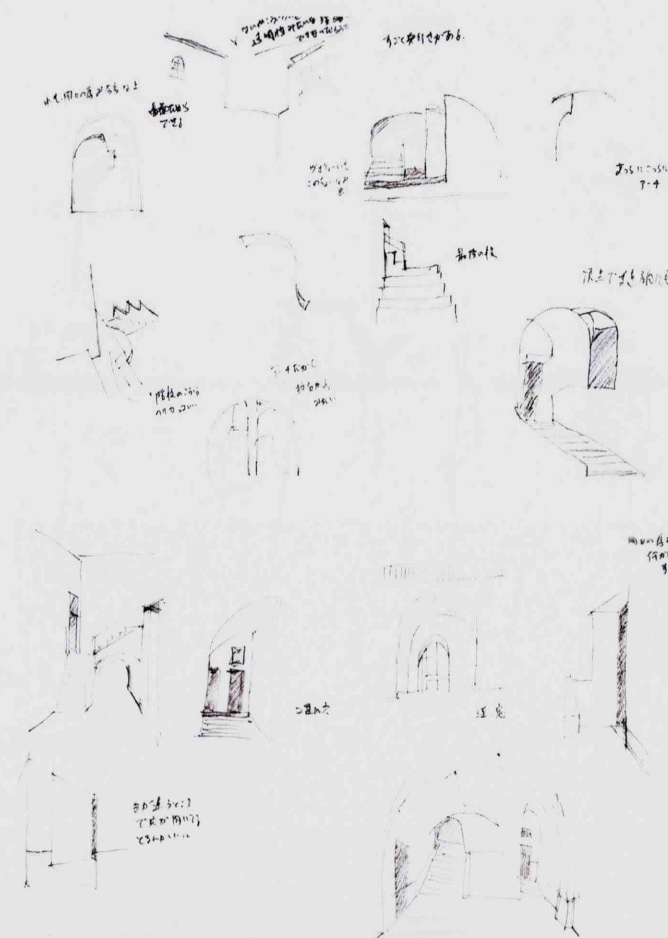
ピカソ美術館（ロラン・シムネ）

パリの邸宅を改装したこの美術館では、内装ではあるものの、至るところで、輪郭の処理が意識されている。隅に施されたこれらのデザインは、終わりのない空間に感じさせる効果があり、厚い壁に囲われた部屋の中であっても、圧迫感のない周囲への連続性がある。



ピカソ美術館（ロラン・シムネ）





## アマルフィの都市空間

アマルフィの都市空間はラウムで溢れていた。

斜面地に立体的に入り組みながらつくられ、真っ白に塗られた、壁面は、光と影によって空気の留まりをつくりながら、奥へ奥へ、上へ上へと続いていく。

このような空間性をひとつの建築の中に構築することはできないのだろうかと考えた。

気になった場所だけをスケッチすることでその場所の性格を読み取っていく。

下の写真は、共有部ともいえる路地空間である。この路地は空気の増減をしながら家の内部と深く関係している。



## アマルフィの都市空間



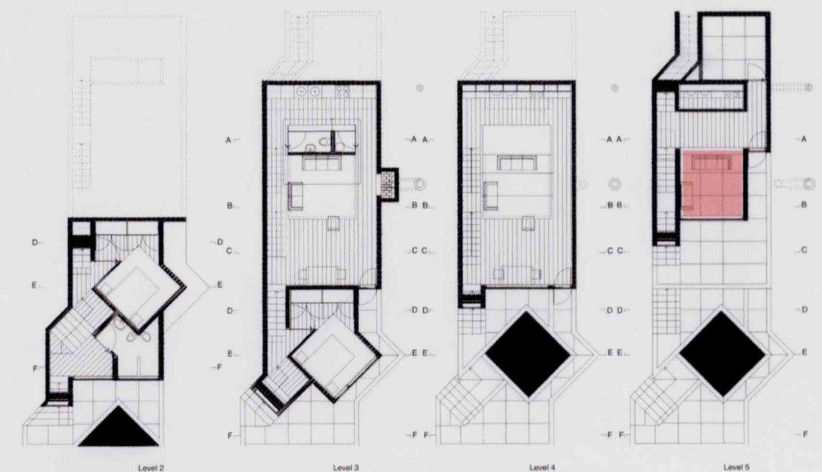
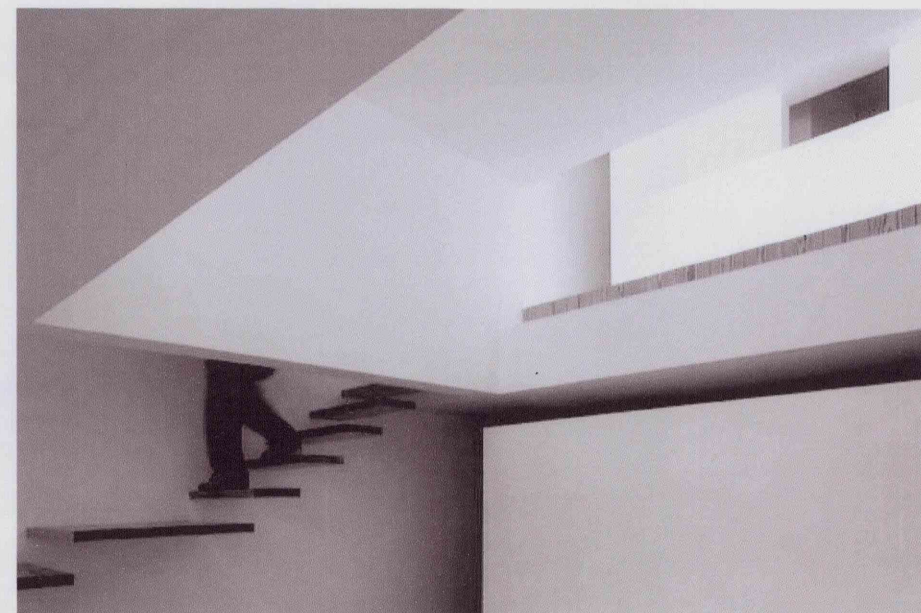
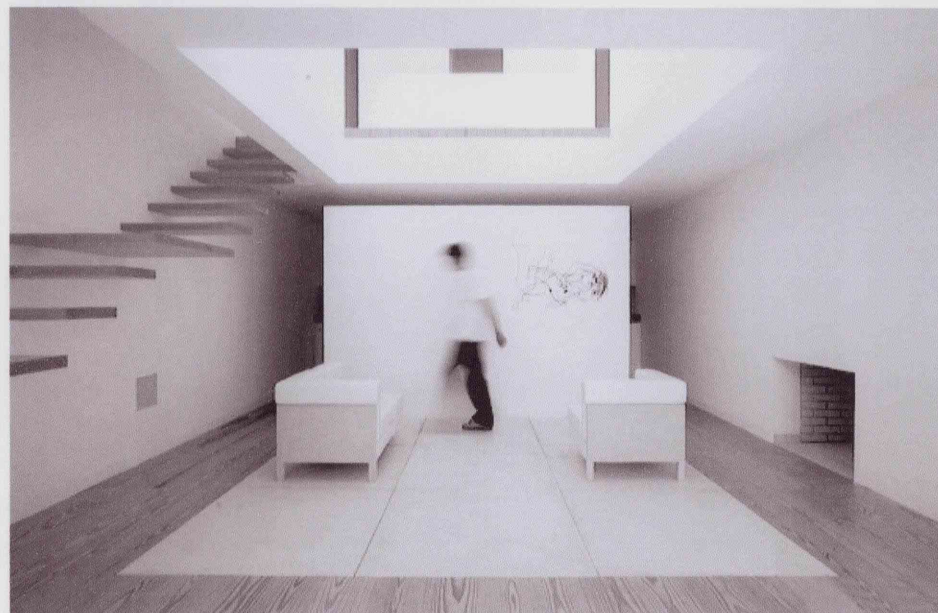
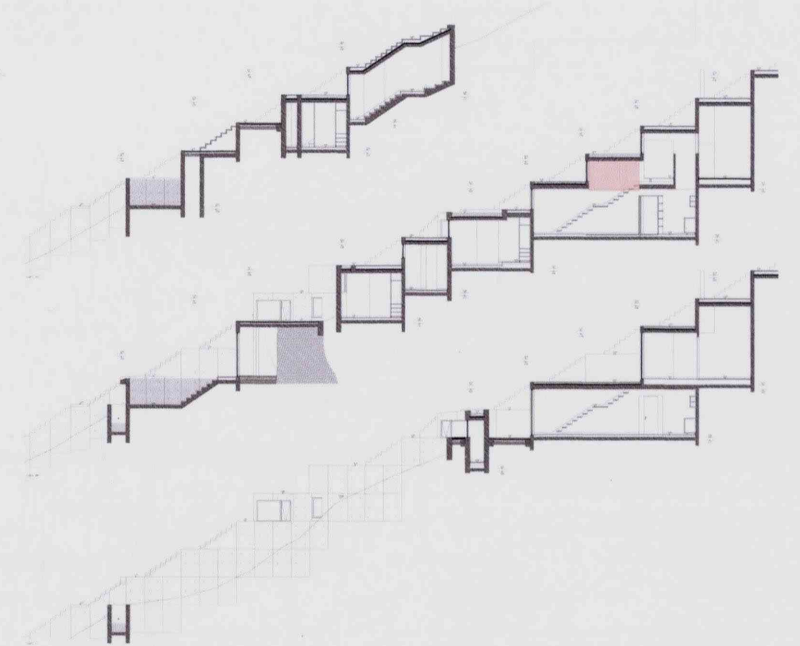
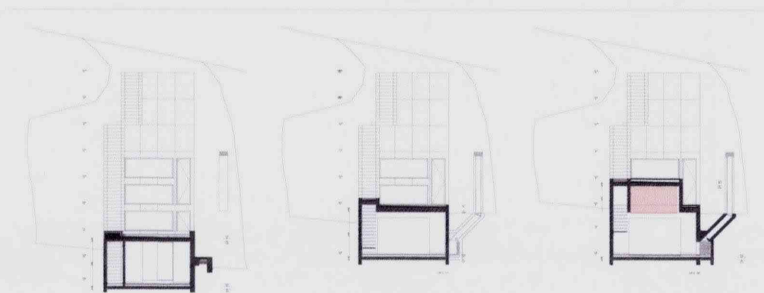


カサ・トロ (アルヴァロ・レイト・シザ)

アルヴァロ・シザの息子であるレイト・シザが手掛けた住宅である。  
斜面地に計画されているが、まさにアマルフィのような空間性が現れている。

その多様性をシンプルな幾何学操作だけで置き換えた稀な作品であるとする。

ここでも空気の厚みを持ったラウムが存在し、白くきれいに仕上げられた面が含みを持たせつつ連続していく。

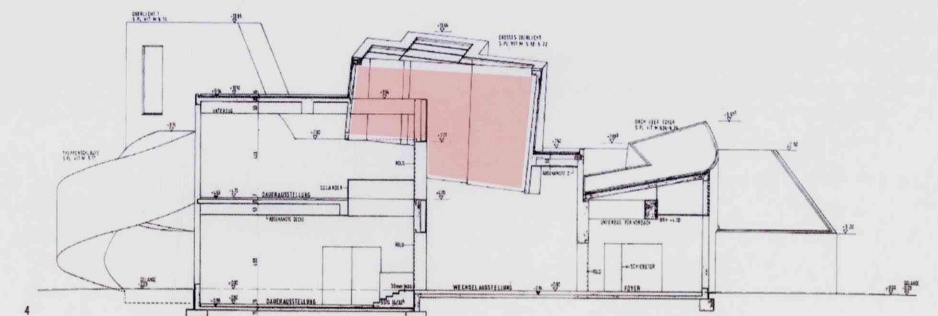
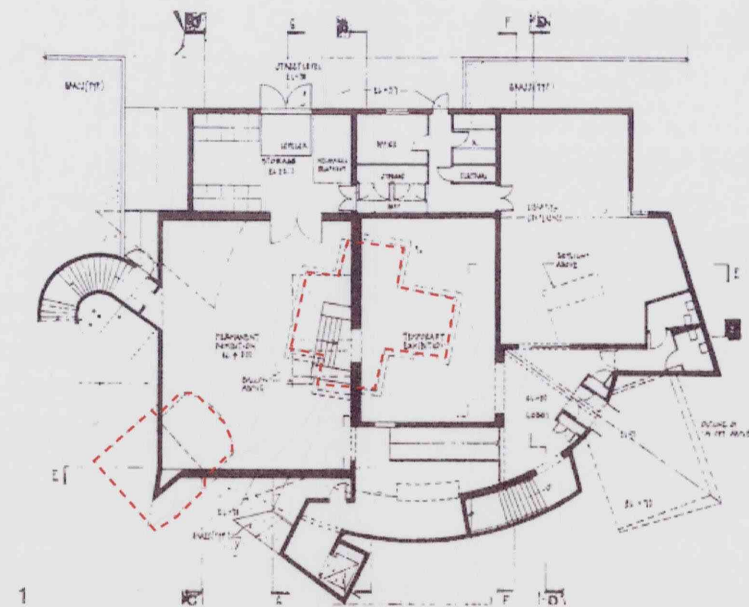
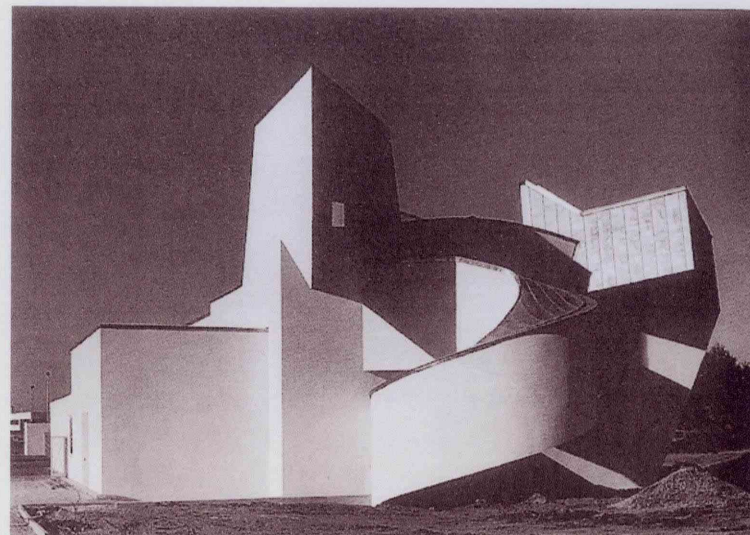
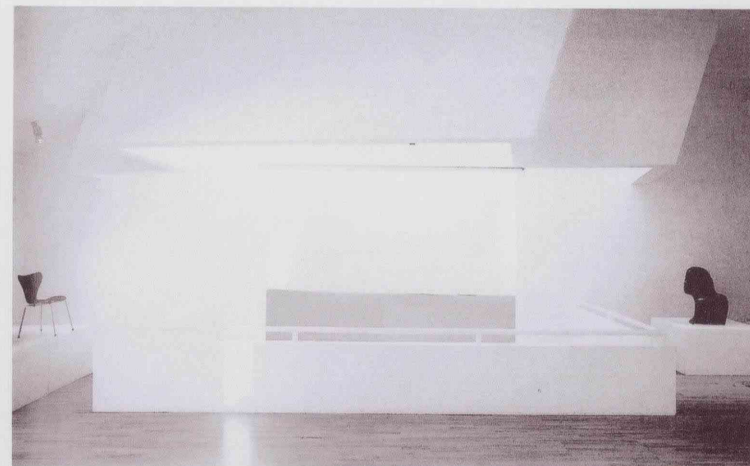
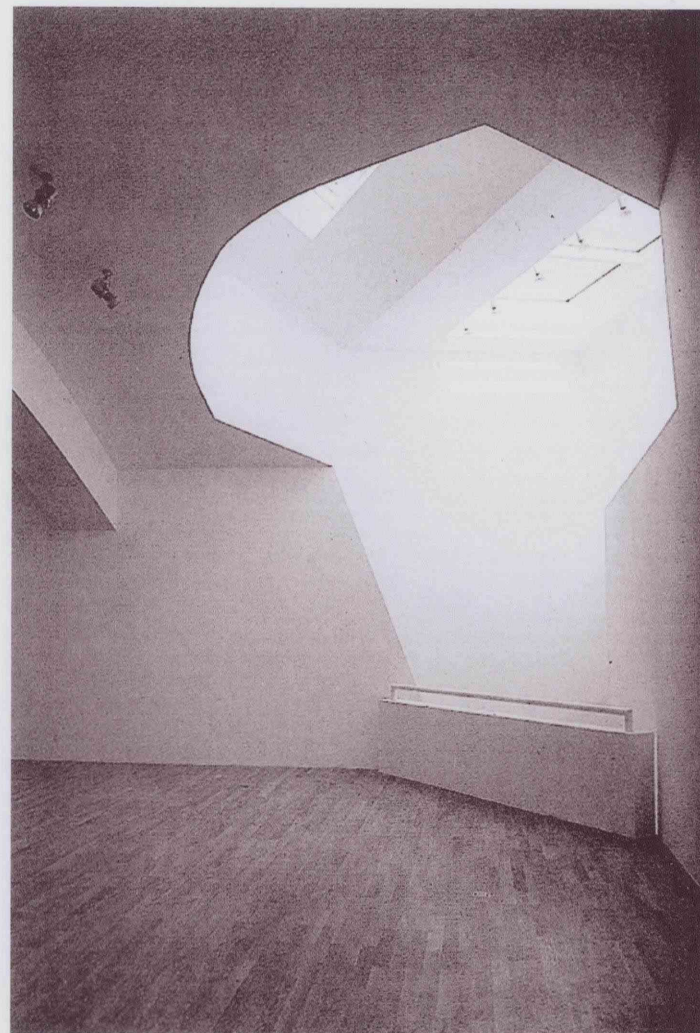


カサ・トロ (アルヴァロ・レイト・シザ)



## ヴィトラ家具美術館（フランク・O・ゲーリー）

フランク・O・ゲーリーのこの作品は、最も空気の輪郭が特徴的に現れている例である。空気を含んだ筒はそのまま貫入したり、衝突したラインで消えていたりする。その空気と光の筒は外部にもそのままのかたちで露出している。



ヴィトラ家具美術館（フランク・O・ゲーリー）

Master Thesis Outline of the Air - Development of RAUM Plan -

空気の輪郭 - ラウムプランの新たな展開 -

page 050

|  |                                                               |                |          |
|--|---------------------------------------------------------------|----------------|----------|
|  |                                                               |                |          |
|  |                                                               |                |          |
|  | あとがき・謝辞・参考文献                                                  |                |          |
|  |                                                               |                |          |
|  | Master Thesis Outline of the Air - Deveropment of RAUM Plan - |                |          |
|  | 空気の輪郭                                                         | ーラウムプランの新たな展開ー | page 051 |





|  |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
|--|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|  |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
|  | <div>参考文献</div> <div>アルヴァロ・シザの建築 (TOTO 出版)</div> <div>alvaro siza Complete works (Kenneth Frampton,PHIDON)</div> <div>domus XI 1990-1994 (TASCHEN)</div> <div>建築設計資料 オフィスビル3 (建築資料研究社)</div> <div>ル・コルビュジェ 建築の詩 (富永譲=著、 鹿島出版会)</div> <div>建築の多様性と対立性 (R・ヴェンチャーリ=著、伊藤公文=訳)</div> <div>STEVEN HOLL 1986-2003 (EL croquis)</div> <div>マニエリスムと近代建築 (コーリン・ロウ=著、伊東豊雄=訳)</div> |
|  | <div></div> <div>Master Thesis Outline of the Air - Deveropment of RAUM Plan -</div> <div>空気の輪郭 ーラウムプランの新たな展開ーpage 053</div>                                                                                                                                                                                                                                            |